

## 山本武の「陣中日記」上

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 隼田, 嘉彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/5924">http://hdl.handle.net/10098/5924</a>

## 山本武の「陣中日記」 上

隼 田 嘉 彦

### はじめに

本稿は、日中戦争に「出征」した山本武の日記の翻刻である。その前後のものを含めて、三回にわたって連載される。

武は、これらの日記と抜群の記憶力をもとにして、詳細な「従軍記」をまとめることがあった。この記録は、御長男の山本富士夫氏と令弟方および編集を担当された稲木信夫氏の御努力により、すでに『一兵士の従軍記録——つづりおく、わたしの鯖江三十六聯隊』として刊行されている。<sup>(2)</sup>この書物は、一兵士の目を通して見た日中戦争史といえるものがある<sup>(3)</sup>、きわめて興味深く、「貴重な記録」と称されてもいる。

ただし『従軍記録』は、日記を下敷にしてはいるが日記そのものではない。富士夫氏によれば、武が「六十五才になってから一年ぐらいの間に、古い日記帳を紐解きながら、まとめたもの」(三〇四頁)であるから、戦後三五年経った時点で書かれた手記、回想録にはかならない。また上梓に当たって、紙数の関係から割愛したり、手を加えた部分もあるという(三〇六頁)。

もとよりここで、そのような処理の仕方についてとやかくいおうとしているのではない。『従軍記録』の価値は吉田氏の御指摘通りであらうし、部分的な割愛や文言の変更も、書物の性格や出版の事情を考えればむしろ当然の配慮かと思われる<sup>(4)</sup>。

しかしながら贅言するまでもなく、戦争に関する記録は、戦時下に書かれたものと、戦後に回想したものとは、史料的价值が根本的に異なることもまた事実である。稲木氏が武の心情にまで踏み込んだ的確に指摘しておられるように、日記の内容がそのまま『従軍記録』に反映しているわけではないのである<sup>(5)</sup>。

戦地からの郵便物に対する検閲がきわめて厳しかったことを考えれば、これらの手帳を持つて帰国しえたことは、まことに「幸運」であったとしかいえないようにはあるまいか。武は、絶対に公表しないという約束で持ち帰ることを許された<sup>(6)</sup>と回想しているが、それだけに大変貴重なものといわねばならない<sup>(7)</sup>。

あるいは屋上屋の誇りを被る恐れなしとしないが、むしろ本稿によって『従軍記録』の史料的价值が一層高まることも期待されるのであり、敢えて全文翻刻する所以である<sup>(8)</sup>。

## 一 日記の概要

日記は様々の形態の手帳に書かれているが、書誌に関するものはそれぞれの部分で述べるとして、初めに一般的な概要を示しておく。『従軍記録』編集の時には五冊しか見えなかったようであるが、その後富士夫氏の御尽力によって新たに二冊見つかかり、現在次の七冊が残っている(○印が新出)。

- 1 昭和十二年九月十日～十二月二日。
  - 2 昭和十二年十二月二日(承前)～昭和十三年一月十日。
  - 3 昭和十三年三月十八日～五月五日。
  - 4 昭和十三年五月六日～八月九日。
  - ⑤ 昭和十三年八月九日(承前)～十一月一日。
  - ⑥ 昭和十年三月十七日～八月初旬。
  - 7 昭和十九年十一月二十六日～昭和二十年十月。
- 見られるごとく、1と2および3～⑤が一連のもので、2と3の間ならびに⑤の後が欠けていることになる。ただし、散逸したものなのか、あるいはもともとなかった(武が付けなかった)のかはわからない。⑥は初めて鯖江三十六聯隊に入隊した時のもの、7は八丈島守備隊の一員として派遣された時のものである。いずれも日中戦争に関わるものではないが、武の為人を理解するうえで貴重と思われ、かつ新兵訓練など興味深い記事も多いので、第三回目に掲載することにした。

手帳中の主たる記述はもちろん日記の部分である。しかし、我々の手帳もそうであるように、いくつかの手帳の後半部分は、備忘録、住所録、雑記、覚書などにも当てられており(以下覚書と総称)、それらの中には数字(数式)のみ書かれているものなど、今では全く意味を取れなくなっているものも少なくはない。しかし中国の少年との筆談など捨てがたいものも多いので、技術的・経済的に印刷が困難と思われるものを一部写真で掲載したほかは一切省略せず、細大洩らさず翻刻することにした(凡例参照)。

武の日記で注意されてよいことは、確かに日記ではあるが、一日が終わった後、心静かに机に向って書いたようなものではないということである。武は、鯖江三十六聯隊の中隊長や聯隊副官などを歴任した坂武徳に宛てた、昭和十五年九月九日付の書簡で次のように述懐している(二八九頁)。

子供の頃から文章を書く事が好きであり習慣になっていたので、寸暇を見ては弾の下、突撃の直前直後、或は行軍の休憩中、又は月明の許、その時々の場合と共に自分の感想を赤裸々に手帳に記し置きました。

武の日記は、戦闘の最中に折りを見て書かれた、文字通りの陣中日記なのである。したがって毎日書く余裕があったとは限らず、数日分をまとめて書いたり、一日分を二回以上に分けて書いたとみられるものもある。様式や書き方も一定しておらず、縦書きあり、横書きあり、また片仮名と平仮名が混じった部分があるほか、漢数字と算用数字の混用も多くみられ、筆記用具も万年筆(赤インキを含

む)、鉛筆(色鉛筆を含む)、筆(墨書)などがこもこも使用されている。

それだけに、武の感動・緊張・焦燥・周章・恐怖、戦争観・中国観、上官や部下との葛藤、婚約者や家族への想い、心の揺れ、さらには「帝国軍隊」の諸矛盾などが、飾り気なくありのままに、素直に表現されているといつてよい。<sup>(9)</sup>そしてそれらは、時に字形や字体にまで表れているのであるが、印刷ではごく一部を除いてそこまで示せないのを遺憾とする。

## 二 武の略歴

日記の内容を理解するためには、ある程度まで武の履歴や家族関係などを承知しておくことが必要であろう。以下その限りで武の略歴を年表風に示しておく。<sup>(10)</sup>

大正二年(一九一三)六月四日、山本總左エ門・しをの長男として、福井県丹生郡吉川村平井(鯖江市平井町)に生まれる。生家は約二町歩の自作農。宗派は法華宗、旦那寺は平等会寺。後年同寺の太途になるなど敬虔な日蓮門徒であり、日記にもそのことが表れている。

大正九年四月、吉川尋常高等小学校入学。

大正十五年三月同校卒業。成績・品行ともに文字通り優良で、入学してから卒業するまで毎年優等賞、欠席も二年生の時に病欠が一回あったのみである。

同年四月、福井県立福井農林学校入学。二年進級時の成績が八二名中四番。

昭和六年(一九三一)三月、同校卒業。成績は、教練のみ乙(下士官適)、すなわち「士官不適」、他は全て甲。全校二番で卒業し、優等賞、皆勤賞、松平奨学賞、五年間精勤賞(欠課一〇時間以内、遅刻五回以内)を受賞。以後父と共に農業に従事する傍ら、青年会(吉川青年団平井支部)で活動。翌年副会長。

昭和八年六月、徴兵検査甲種合格。

昭和九年一月、歩兵第三十六聯隊入営。第五中隊第三班。上等兵、風紀衛兵司令となる。

昭和十年六月、第六中隊へ転出、満州派遣、八月四日、新京駐屯。十二月帰還。

昭和十一年一月一日、満期除隊、帰宅。その後青年会長。

昭和十二年、正月頃南条郡南日野村西大道の安川ハルエとの間に縁談が起こり、三月二日見合い、四月十一日結納、ルビーの指輪を贈る。挙式は十一月の予定であったという。三月末に妹のサグ子が下河端の福島正敏と結婚。春以来、在郷軍人会吉川分会副分会長、八月、分会長。九月、日中戦争応召、歩兵上等兵。青年会長など辞任。十二月、任歩兵伍長。

昭和十三年七月、任歩兵軍曹。

昭和十四年七月、召集解除。八月六日、安川ハルエと結婚。

昭和十五年八月三日、富士夫誕生。

昭和十六年、翼賛壮年団副団長となる。

昭和十九年十一月二十八日、召集令状来る。十二月三日、敦賀中部六四部隊応召。

昭和二十年八月、任陸軍曹長、八丈島守備隊転出。十一月十三日、復員、帰宅。

復員後の武は、農業の傍ら、民生委員、組合長、区長、教育委員や公民館長などを歴任したあと、昭和五十九年四月二十三日七十一才で逝去した。

(1) 山本富士夫氏蔵。手帳六冊、ノート一冊、以下手帳と総称。

日中戦争の時のものが五冊、その他二冊からなる。

(2) しんふくい出版編集、安田書店刊、一九八五年、以下『従軍記録』と略称。同書からの引用は(数字頁)として文章中に挿入して注記。「子供や孫達に読ませるつもりで記した」もので「全野紙四百枚程」(二八九頁)、原稿用紙八〇〇枚に相当するという(二〇六頁)。なお、日記の解説に当たっては、この書を大いに利用させていただいた。

(3) 吉田裕『天皇の軍隊と南京事件』九三頁、青木書店、一九八五年。

(4) 原稿にあった長文の感想を割愛したり、「支那事変」「大東亜戦争」などを、日中戦争・太平洋戦争と改めたことなど(三〇六頁)。

(5) このことは、武が口を拭いたり、「改竄」したりしたことを意味しないし、同書の価値を貶めるものでもない。むしろ率直過

ぎるくらいに語られていることを、武の名誉のために指摘しておくべきであろう。稲木信夫「編集あとがき」(三〇六～三〇八頁)参照。

(6) 武は次のように回想している(二〇七～二〇八頁)。やや長くなるが引用しておく。広島の似島へ上陸した時の憲兵隊とのやりとりである。

さて、私が戦斗中に記した日記帳が、あまりに生々しく戦いの惨状、中国兵の刺殺、戦場の恐怖の心情をかき、そして戦斗詳報、記録もあるので、持ち帰りは許可できない、即ち没収すると言われたのである。私は非常に困惑し、

「なんとかお許し願えぬか。」

と頼んだところ、その上等兵は、

「これだけ刻明(ていめい)に書いたものを没収するのは、自分としてはしのびがたい。いちおう上官の指示を受けてみよう。」

と言って、手帳を持ち去り、少したって、

「いちおうお返しする。ただし、今後絶対、出版、講演、その他一切公表しないことを誓約してもらいたい。」

「承知しました。約束します。」

ということでその憲兵上等兵宛の誓約書に官姓名、本籍地、住所、氏名を記し、捺印して、返してもらうことができた。その上等兵の名前を忘れてしまったが、理解あるその措置にいまなお感謝しており、とくに今度、この日記をもとにして私のたどった軍歴を記録するにあたっていっそうその感を深

くしている。

(7) 坂武徳の「序」によると、鯖江三十六聯隊関係の日記や回想記はいくつか残るが、「第一線の実況を詳細に描写されたもの」としては、山本武氏の『従軍日誌』が唯一の記録である」という(四〜五頁)。

(8) 翻刻に当たっては、坂武徳『歩兵第三十六聯隊中支方面ニ於ケル行動概要』(昭和五十八年)も大いに利用させていただいた。以下『行動概要』と略称。

(9) 武は、豪雪の合間に投函した、昭和五十六年一月二十三日付坂武徳宛の書簡で、「自分の行動、言動、思想等も非国民的なことと多く、全く汗顔の至り」(二九二頁)といている。

(10) 山本武「わが人生回顧録」(しんぷくい出版、一九八四年五月)『従軍記録』、鯖江市立吉川小学校所蔵「学校沿革誌」、「学籍簿」、福井県立福井農林高等学校所蔵「職員会議録」などによる。

一九九五年	七月	七日成稿
一九九五年	九月	一八日補稿
一九九五年	一〇月	一三日補訂

### 三 翻刻

凡例

各手帳を、先掲の番号に従って、第一冊、第二冊〜第七冊と称することにし(○印は省略)、それぞれに解題を付け、本文は日記と覚書の二つに分けて印刷する。本号には第一冊と第二冊が収録される。翻刻に当たっては、できるだけ原本の雰囲気崩すことのないように心掛けたが、概ね次のような方法に従った。

(1) 見出しの日付は統一的な表記にせず、横書きの日記の算用数字を漢数字に改めたほかは、曜日・天候、「二十」「廿」「三十」「卅」など、全て原文のとおりである。

〈例〉 一三三三 (一月二十九日)、書き替えた場合には、「廿」「卅」を使わない。

(2) 鉛筆・筆・万年筆の区別は、その都度本文中に示した。

(3) 片仮名と平仮名および仮名遣いは原文のままとした。

(4) 漢字は原則として常用体に改めたが、一部旧字体を残したものもある。

(5) 誤字・当字・送り仮名のほか武の書き癖などは、意味が通じる限り訂正せず、注も施さなかった。

〈例〉 いたゞく(いたゞく)、はじこ(はしこ)、お話し(お話し)  
背ノ(背囊)、上ト兵(上等兵)、特ム(特務) など  
ただし、偏や旁などの間違いや書き損じに類するもので、態々

作字するには及ばないと判断されるものはこの限りではない。

- (6)本文中の数字は、漢数字とローマ数字はそのまま用い、算用数字は、年月日のほか人数・年令・分量・距離・番地など漢数字に改めたが、軍隊用語や箇条書の条数など、一部原文通りにしたものもある。

〈例〉10米(一〇米)、100人(一〇〇人)、改める場合、年月日のほかは「十」「百」を使わない。

- (7)福井県の地名には日記のみ傍線を付けた。中国の地名は原文を尊重したが、一部「昭和十二年参謀本部南支那十万分一地形図」(本学助教授林和生氏に見せていただいた)のほか、『従軍記録』『行動概要』などによって改めたものもある。

- (8)校訂者による注はすべて( )を付けて示し、概ね近世史料集などの約束に従って、傍注に(ママ)(脱)(カ)(衍)などと付け、全体にわたるものは片仮名混じりとした。そのため原文の( )などはすべてへんがに改めた。なお、破損や訂正・抹消などは、□・△・■で示したが、一部無視したものもある。また会話の記号は「」や「」など区々であるが、原文通りにした。

- (9)句読点と改行は原文を尊重しつつも、校訂者において改めた部分もある。ただし、その区別はしていない。

- (10)絵や略図のほか、文字が斜めに書かれたり、重ねて書かれるなどしているため、そのまま印刷しにくい部分は、(写真1)(写真2)と本文中に一行取って注記し、写真を各冊の末尾にまと

めて載せた。したがってその部分の積文はないが、わかりやすくするために一行ほど重複して印刷したものもある。またいくつかの写真には、簡単なコメントを付した。なお、写真の番号は通し番号とする。

- (11)書名のほか映画や芝居・歌謡曲の題名などには、適宜「」を付けた。

(12)武が感動して大きな文字を書いたとみられるものは、稍大きめの文字で印刷した。

- (13)欄外に書かれたものは、(欄外)と注記して適宜本文に挿入して示した。

- (14)覚書の部分には一頁毎に\*印を付けた。ただし印刷の順序は解題に示す。

最後に二つのことについてお断わりしておきたい。一つは、これらの日記が戦時中のものであることに起因し、かつ戦前にはごく普通に使われていたものであり、武のみが特別に使用したわけではないけれども、現在では使用してはならない語句が見られ、当時の偏見に基づく記述があることに關してである。本稿は史料紹介であるのでそのまま用いているが、もとよりそれを認めたいうえでのことではない。

二つ目は、本稿を草するに当たり、多くの方々の御教示を得たが、それらについては、本連載の終了時にまとめて謝意を表させていたきたい、ということである。

## 第一冊

### 一 解題

形態…小型の手帳、五七枚（一枚欠）。頁の上部に「月日」のみ印刷された自由日記様式。タテ一三×ヨコ八cm。縦書。右開き。万年筆、鉛筆、筆で書かれている。なお、筆と墨は敵兵の雑囊の中から「拾ふ」（十月二十五日）とある。

表紙…布表紙、表紙の上部に「Memorandum」と印刷され、武の自筆（墨書）で

「昭和十二年九月十日ヨリ

陣中日記

山本 武

とある。

内容…武に召集令状が来た昭和十二年九月十日から、鯖江三十六聯隊入隊、上海上陸、南京進撃の開始、そして同十二月二日の金壇到着まで。この日の記事は第二冊に続く。日記の部分が一〇四頁、続けて五頁分の覚書がある。初めての实战で、恐怖心がよく表れており、事実十月二十三日から二十五日にかけて、文字がかなり乱れている。なお、覚書の最後の部分には書かれた事情ははっきりしないが、戦争は日本と中国にとつて最も不幸であり、今後両国はともに仲良く発展しなければならぬ、という趣旨であり、きわめて興味深く思われた。

## 二 日記

(写真1)

九月十日

午前五時二十分、遂ニ待望の動員令下る。

今か〜と落ちつかかなかつたのが、却つて令状を貰つて心の底から落ちつくものだ。朝は親子三人で土正の農林一号刈り、道を通る人々が、心から御苦勞様を言つて下さる。又今度の動員は流石ニ大きかつたと見え、吉川も四十二名、道通る人々も何時もよりは遙に大勢のやうだ。氣比庄の丹羽にも会ふ。

午後三時半の電車にて大道行き。彼女との約束にも、動員が来たらすぐ第一に報らせるからとの約束を、

(ココデ第一頁が終り次ノ頁が一枚破ラレテイル)

九月十二日

午前十時より、吉川小学校にて武運長久祈願祭行はる。小生応召者代表として御挨拶なす。

午後一時守君入営。私は下河端敬子の所より、鯖江・柳原・高森等挨拶廻り。帰りに鳥井にておよばれ。即ち本日は二丁掛の九月講也。帰りしは午后九時頃。

九月十三日

此の間のお約束により、午前十時半発列車にて、春江と二人で福井へ行く。彼女の信仰心には全く心打たるものあり。即ち福井着後直ちに中島の鬼子母神様へ参詣す。有難さに心うたれ、すか〜しい気分になつて約一時間程にして出づ。それより松竹座に

て映画を見るへい。戦争映画也。「愛に生きるもの」も又面白かった。ニュース大いに価値あり。それよりだるまやにて食事致す。今日はお祖師様の日なる故御精進料理。

藤島神社参拝。足羽山に登り、六時〇二分発列車にて帰る。楽しい一日だった。春江も楽しさうだった。

(欄外)へい「タンネンベルグの大会戦」

九月十四日記

応召ニ当り携帯物品覚書

- 一、奉公袋 内容品 一、令状 二、軍隊手帖 三、印鑑
- 四、各証書 五、日用品 1手拭二本 2刷毛・歯磨 3石鹼 4ハンカチーフ 5インク 六、梱包用材料 七、面会日ノ時シャツ一枚 八、カミソリ 九、国旗 十、葉書 十一、便箋 十二、封筒 十三、切手

午前中休み。午後二時より一恵君に面会に行く。それより小泉・川去挨拶廻り、岩永に行き夕食御馳走になる。

九月十五日

(日付ハ欄外ニ算用数字テ書カレテイル)

朝起床と同時に家中にて大掃除をなす。六時の列車にても来ない為め、それより学校・役場、村長等村内を挨拶廻り。帰宅後、神様、お寺、先祖お墓に参拝、告別をなし武運長久を祈る。午前十時四十分、大道より春江とお母さんがお出でになる。お昼より区内各戸挨拶歩き。午後より夜にかけて家に居って皆様に御挨拶。午後十時、春江と共に楽しく最後の一夜を語り明かした。

九月十六日

(同前)

午前四時起床、慌しく朝食を済し寺に参拝。雨の中を停車場に至り、臨時電車に乗る。それより前、区長様から色々とお話あり。私の方より出征者代表して挨拶、万歳の声に送られて勇躍出発せり。

七時入隊、無事入営す。全く同年兵や初年兵の多くみれして、故郷へ帰ったやうな気分あり。松田の分隊へ入る。

午後河端の兄さん、守君も来る。

九月十七日

中隊長殿、上海事変実戦談。

午後渡河演習、手榴弾投擲演習アリ。呑気に一日終る。

九月十八日

本日は満州事変記念日なり。

此の時に応召しある事又感慨無量なり。午前中秋服適合検査あり。

午前十時チブス予防接種、種痘を行ふ。午後軍装検査準備。

酒保あり、大混雑せり。

九月十九日

午前中中隊の軍装検査あり。

午後〇時半整列、練兵場に於て午後一時半より練隊の軍装検査、簡単に終る。

聯隊長殿の訓辞、身に浸むものあり。

旅団長閣下・知事閣下・福井聯隊区司令官殿等の祝詞・訓詞あり。終つてより補充隊兵士と面会あり。清君等とも会ふ。

夜騒ぎ乍ら寝に着く。

九月廿日

午前八時ヨリ家族との面会あり。九時頃、母親始め村の皆々様お出で下さる。大道より春江も一人面会に来て下さる。心から嬉しく思ふ。父親も少し遅れて来る。沢山の御馳走をいたゞき、餞別ももらふ。十二時の食事ラッパで名残り惜しくも別れる。  
餞別貰え

庄左衛門母・かじ松太郎・河端小母さん・米屋母・鳥井父  
たばこ

弥三郎・儀大夫・盛之助・□□・明・静・河端お父さん  
勇君よりの言伝へ

武生福寿堂〈福岡茂作〉ニ電話。

西山修吉ヲ呼出シ、川去ノ笠原勇、本日前十一時二分列車にて出発、此の間言ヒ置キシ所へ出テ下サイ。

九月廿一日

午前中休み。午後二時練兵場行き、遊んで帰る。一日中休み也。

九月廿二日

一日中休みなり。

軍装を実備、出発準備を完了す。午前中より中隊の兵多数度々外出す。然し、俺は既に浮世に未練もなし、又出たいと思はず、外出はせず。

午後十時よりぼつ／＼中隊整列、十一時二十分大隊整列完了。煙ノ如き霧の中、をぼろ月はほのかに明るい。暫しの仮寝の兵舎を後に、出征の途に着く。廿三日○・二〇分借陰校に到着、村

人多数に面会し列車に乗車、二時二十六分発にて出発す。途中に

ては不明なり。鯖波にて春江から見送れり。写真と手紙を貰ふ。約四十分の面会あり、極めて楽しみだった。十一時大阪着。電車にて左記お家へ宿営する。

九月 小山景治様方 山本武  
青山緑 名葉善一

大阪市東成区大今里町七〇八

小山義次様

九月廿三日

午後三時小山様方へ着。それより入浴に行き、夕食は多大の御馳走になる。午後十時頃まで休み、それより杉永君と二人で裏町のカフェーにて遊び、前一時頃帰宅、寝に着く。

九月廿四日

命令

一、明後廿六日乗船ノ予定。

二、明二十五日前九・〇〇整列、銃・剣・防毒面・鉄帽携行、

寺前集合。

三、大阪城見学者取纏メノコト。

九月廿四日

朝九時半整列、<sup>鉄帽</sup>防毒面を分配さる。同時に携帯口糧及擬装網を分配さる。

昨夜外出せるものありと、特曹より注意あり。大阪三輪家始め西村春吉様妻等来る。梨一袋と餞別二円を貰ふ。

午後五時頃八十一さん、清さん来る。午後八時頃より名葉と四人で、千日前・道頓堀等見物、ニュース映画を見て、明治製菓にてフルーツポンチを食べて、午後十一時半頃帰宅。青山衛兵

九月廿五日

午前九時整列、防毒面の装着演習。拾時より大阪城見学の為め行軍、暑し。仲々苦勞したり。

午後三時まで外出許可あり。名葉と二人で大劇を見に行く。レヴュー、「軍国子守歌」等あり面白かった。

夜最後の一夜を語り居る中、命令により明日前五時整列となる。準備を完了して寝に着く。

九月廿六日

前三時半起床。五時中隊本部前に集合、電車により築港第一突堤に至り、約三時間休憩す。十一時大隊の整列、十二時乗船開始、テープや歓呼の声賑やかな中に、三時十五分出帆す。天気晴朗にして気持良し。昼の疲れもあり、夜はグッスリ良く寝る。

九月廿七日

船ハ瀬戸内海を進む。正午頃下関海峡を通過す。午後四時頃よりいよ／＼玄海灘にかゝる。波稍高く、少々酔ふた者もありしも、渡満の時のやうに大した事無し。

九月廿八日

波穏かにして、船は第九師ノ精銳を乗せたる御用船八艘、威風堂々大洋の真中を西進中なり。

島影一つ見づ。

九月廿九日

午前中船は、名も知らぬ支那沿岸地の島の影に潤る。日本の多数の軍艦あり。日本の威大さ思はれる。

午後四時過ぎ再び動き出す。上陸準備を完了。

九月卅日

上海ニ上陸。別ニ感想トテモ無シ。

一時間休憩後、ウースンニ向って行軍、暑さ、苦しさ、言語ニ絶す。

午後五時聯隊は広場に集合。

来る道附近支那人の死ガイ累々たり。天幕露営也。

九月十月一日

午前六時半出発、行軍。午後七時過ぎまで行軍を続ぐ。全く死以上の苦しみをなす。

故郷を思ひ、在りし日の幸福なる自分の姿を思ひ出し、苦しさに涙出づ。幾度落伍せんと思ひしが、出発前のあの歓呼の声、激励の言葉を思ひ出し、齒を喰ひしばって頑張る。

やうやくにして午後八時休む。我は給水の為め、寝に就くは午後十二時也。

南無妙法蓮華經と唱ふ。又気持良し。

感想

戦争！それは実に想像以上のものである。我等は未だ第一線に立たざる為め、真の味は判らないと言へ、上陸二日間の見聞せし所、体験せし所を考へる時、実に言語に絶するものがある。

上陸第一歩、早くも十貫余の軍装を背負つて数里の道を行軍し、第一夜は臭気ぶん／＼たる死体のそばに天幕露營である。遙か彼方、恐らく戦線であらう、大砲の轟、爆撃の音、火炎、実に凄いと云ふか、恐しいと言ふか、名状すべからざるものがある。第二日の行軍、恐らく一生を通じ、かゝる苦しさ、かゝる恐ろしい行軍は又と無い事であらう。行けども／＼果しなき変化も無い悪道を、支那人の死体の臭をに鼻をつき乍ら歩くそのつらさ、背ノの重みは益々加わるばかり。

十月一日の行軍に、一寸落伍せる者約半数也。戦争に勝つためには、あらゆる苦しさ、あらゆる手段を用ひるのが戦争である。

十月二日

天幕露營の夢も午前六時破れ、それより各小隊より二十名は土囊受取りの為め使役、我々は後に残り飯盒炊事、里芋を掘り芋飯を作る。とても美味しく久しぶりに楽しく食事す。

午後四時まで休止、今日はほんとに楽しみだった。

四時、張家宅に向つて進撃、途中クリークの為め通行出来ず。夜九時と言ふに全員器具を下し橋を作る。張家宅に十二時到着、民家に入り休む。山砲兵、昨日一名死、一名負傷の声を耳にす。七聯隊後備と会ふ。

十月三日

午前七時起床。使役に出よとの事にて準備。大隊本部にて河端の兄さんに会ひ、互に励まし合ふ。

九時頃より、敵の砲丸旺に落下し始む。II本部前にて山砲隊戦

死者の死骸を焼き居り、砲丸はひっきり無しに落つ。敵は此の張家宅を目標とせるものゝ如し。砲丸の恐しさは又想像以上也。皆物言ふ者とても無し。我々の居る前、二、三十米の所へドカン／＼と落つ。

遂に輕重隊にては数名の負傷あり。片手を取られたる者、足をやられたるもの等、可愛さうなり。米も無く、塩気もなし。汚いクリークの水を汲み、食水となす。正午頃、敵の目標となるを避ける為め、火を焚く事を禁ぜらる。

午前十時頃聞きたる敵状及我々の此の後の行動左の如し。

(写真2)

十月三日

午後、敵の砲丸も漸く下火となり、江南の地は小雨降り出し、道路も稍ぬかるみとなる。午後二時より、道路補修の為め使役兵出づ。途中A隊佐々木泰正君に会ふ。午前中の敵の砲弾により、一名重傷、一名負傷の報を聞く。次の部落に於て守君に会ふ。元氣なり。互に励まし合ふ。

帰りて一旦出動準備完了せしに、俄に我々II大隊は、三十五R指揮下に入る為め師団予備隊となる。野菜物を漁り、野羊を殺し、夜はとてもおいしい肉汁、はじき豆、里芋のころ煮等にて夕食。

大阪以来の御馳走にして、皆喜々として夕食を終る。八時頃小隊長より注意事項を聞き、寝に着く。

夜半十二時頃、非常呼集の如き慌しさにて軍装、出発せんと中隊本部前に至るや、敵弾引き続いて落下、遂に明け方まで、弾丸の

洗礼を受けつゝ恐怖の中に待期す。

十月四日

午前五時頃の弾最も多し。西方・北方に於ては僅々数百米の地点に於て、旺に銃砲声絶間無し。夜明けと共に友軍の集中射撃、爆撃始まり、敵は沈黙。朝食は再び元の位置に帰り、千切大根・小夜豆腐の味噌汁にておいしくいだゞく。顔をそり、髯を延ばして見る。

十月四日

午後五時整列、土ノを第一線運搬の爲め、第三分隊及第一分隊の一部と十五名出発、北浦準尉の指揮により出発、着剣弾ニシテ非常なる決意にて行く。中隊長殿より酒を貰ひ士氣振ふ。

途中途を迷ひ敵前にて小銃MG弾を受け、進退谷まり困りたる事、敵の榴弾の乱射を受け、恐しき思ひをなす。始めての第一線、恐しきものなり。皆々恐しさに体を伏せ恐怖にふるふ。

約一里の途を夜半十二時頃までかゝり、漸くにして目的を達す。帰路は依然弾来るも安心して帰る。一時、張家角に到着、寝に着く。

十月五日

残余の三小隊ハ、器材運搬のためにR本部まで行く。敵弾を受け九時頃帰る。

我々はお菜を作り昼食。

里芋のころ煮をつくりおいしく夕食。

午後四時半整列、いよ／＼第一線に行く。暗い夜途をR本部に向

つて進撃。

敵弾来る事物凄し。六中隊一名、七中隊一名負傷す。II大本部にても鉄帽に弾を受けしものあり。

十月六日

午前四時再び出発、第一線近くまで進撃。午前八時到着、敵弾下に休む。岸下吉栄遂に流弾にて負傷す。特ム兵等にもあり。

夜九時、異常なる決意を以て春江の写真にもお別れし、最後の手紙を書いて第一線に臨む。此の決意又悲壯と云ふべし。

途中俄にR隊命令代り、再び元の位置に復帰となる。II本部は集決となり帰る。物足りぬ感じと、命が延びた安神と、変な気持ちなり。

背ノを貰ひ、再び入□□をして、別命あるまで休む。

十月七日

午前八時半出発、相家橋に向ふ。すぐ近くなるもクリークに通過を害されて、約半里を歩く。途中敵弾下に危い仮橋を渡り、九時半到着せり。

道中多数の七聯隊の負傷兵に会ふ。相当物凄い傷を負ひたるものもあり。

負傷兵の談によれば、七日一ヶ中隊三名しか生き残れるものなしとの事なり。激戦を思ふ。相家橋にて休止。我三小隊三分隊は家屋の突角にて、敵弾旺に壁にブチ命る。

夜lgを伏せて警戒中、夜半午前三時頃突如敵夜襲し来る。我等は落ちつき払ひ、敵の近づくを待つ。旺に銃を打ちつゝ、約百米位

の線まで近づきたるに、遂に來らず退却せり。弾を込め、劍をつ  
け、手榴弾を準備して待ちたるに残念なりき。

此の晩、敵弾にて飯盒一ヶ射たれ、二分隊の中西は立哨中菜盒に  
弾を受け、辛じて助かる等、いろ／＼の出来事あり。

午前六時より夜明けまで歩哨に立つ。

十月八日

一日中相家橋にて休み。第一線部隊第八中隊等へ送るため、飯を  
炊き、おむすびを造る。使役兵を出し送る。彼等の談によれば、  
途中旺に射撃を受くとの事。第八中隊長戦死。

いよ／＼晩第一線へ出で、八中隊と交替ときまる。午後七時夕食  
を終り準備完了。夜になれば相変らず敵の射撃猛烈なり。

夜半十一時、雨のため膝まで没するぬかるみを通行し、II大本部  
の位置に至る。雨降りしきり、度々転び、歩行困難を極む。十二  
時頃到り、背負ひ袋・防毒面を置いて第八中隊と交替せり。馬教  
頭より約三、四十米程前方に散兵壕あり。此れに入り夜明けまで待  
つ。体は泥まみれ、寒さ加わり心細し。敵陣はひっそりとして気  
味悪く、時々かん高い音をたて、弾来る。

九月十九日

黎明を期して、<sup>占</sup>点領の任重く、孟家宅は目前二、三百米の処にはん  
やりと見える。午前六時二十分頃、突如工兵の鉄条網爆破行はれ、  
我々は一斉に稻の中へ躍り出で、腹這ひになって、互に戦友の名  
と分隊の名を呼び乍ら前進す。弾は雨霰と飛び来るも、仲々当ら  
ぬものなり。敵前二、三十米前の対戦車壕に取りつき、交通壕を

掘り飛び込む。

各分隊の兵十数名居る。鈴木軍曹負傷し、手当を受け居り、其の  
横に戦死者の臥せ居るある。第二分隊の松川等来り、沢崎君頭部  
貫通にて即死の報聞く。余りの事に茫然自失、寒気を覚ゆ。中志  
茂戦死、藪上卜兵腹部貫通にて重傷危篤、大瀬小隊長奇蹟的にポ  
タンにて弾を受け右腕負傷等、悲壮なる戦友達の悲報伝わる。直  
前の敵の重火器猛烈を極め、皆壕の上より銃のみ出し射撃す。

横に居りしlgの河合と云ふ人、敵状を見んとして頭部を狙撃せら  
れ、見る／＼中に血を吐き即死、全く見るに忍びず。中隊長殿以  
下第一小隊の兵士の消息不明、小倉准尉と伝令漸く後退し来り、  
伝令は今一步の所にて足に負傷、と見る見る中に戦友は倒れてい  
く。

あゝなんたる悲惨なることぞ。

前方には一小隊の負傷兵達が、枕を並べて倒れ居るも如何ともし  
難く、交通壕を掘り援けんと旺に作業中なり。

唯今の談によれば、五中隊の戦死傷二十数名ある見込也。或は更  
に多きかも判らず。今の処前途の見通しつかず、徒に敵前に於て  
くやし涙にむせぶのみ。出れば勿ちにして敵弾に倒るゝは目に見  
え居り、援軍も余り来らず。砲兵MG・IAの援護射撃も頼りには  
ならず、飛行機の爆音も聞えはせぬ。

天候は陰悪、壕中は泥海、体は腹の底までずぶぬれ、寒さにふる  
へ、小銃は泥のため機関部<sup>メカニカル</sup>固障。

午後十一時までに孟家宅を占領の予定も何処へやら、憎みても余

りある敵の戦車壕の中に、時間を空費するのみ。

午後一時の砲兵・飛行機の集中射撃と共に、突撃するとの事なるも、果して皆んな飛び出で、突き込む気力の存在ありや無しや疑問と云ふべし。

今は残り少なの煙草を別け合ひ、干パンを~~■~~わけて食べては、戦友の最後を語り合つて居る。人生は又無情なり。俺の運命も如何なる事やら。唯天知るのみ、一寸先は闇なり。

南無妙法蓮華經と唱へ、信仰心により安心を得るのみなり。

沢崎茂君の戦死場 〈十月九日午後二時頃記  
対戦車壕ニテ〉

私の経路、 午前八時頃なり、

(写真3)

第七中隊の戦線進展せず、到底援護射撃も頼みとはならない。目前には頑強なる敵の鉄条網二重にあり、重火器の数は数知らず。極めて苦戦、突撃は到底思案無しと思はれる。

突如敵ハ手榴弾を投げ込み始めたり。皆は泥海の中を走り廻り、名状すべからざる状態に陥り、気力も失せ、寒さは加わり、生きた心持も無し。此の上は、此の壕を<sup>(確)</sup>獲保するに如かずとなし、大隊への連絡のため交通壕を掘り、後に散兵壕を掘る事とし、作業を始め。皆寒さにガチ／＼ふるへ、敵の射撃は依然止まず、日は暮れかゝり、今晚の運命を考へ心細き事此の上もなし。六時頃、六中隊より夕食を運び来る。泥手にてむさぼり食へたり。メッコ飯なれど、とてもおいしかった。

日暮後は、皆夜襲を受け全滅を覚悟しながら、徒らに時の経つを

待つのみなり。

午後十二時頃、藪上ト兵を運ぶ為め、名葉と二人でlgの位置へ行く。四人で担架に乗せて後退す。重く、病人は苦しがり、弾は来り、苦勞す。五百米位を約一時間半費したり。II大本部につき、河端のお兄さんと会ひ無事を喜び合ふ。自分は再び第一線へ行かねばならぬと云ひ、兄さんは行つたら死ぬから行くなと云ひ、結局疲れも出て寝てしまった。夜明け頃中隊全員引揚げて来、死体を担つて再び相家橋に帰る。自分は沢崎君の死骸を運ぶ。帰つてからお題目を唱え、顔を<sup>(拭之)</sup>披いて奇麗にして上げた。後頭部をやられて即死。然し、顔は相変らず奇麗な笑顔で、良い仏であった。

十月十日

(日付ハ欄外ニ算用数字デ書カレテイル)

此の日は、戦友の話をしながら、しよば降る雨に浮世の無情を眺めつゝ、しみりと一日を送る。

夜は中隊長殿の死骸を探しに、中隊より四名の決死隊を出す。今日は丁度動員下つてより一ヶ月目、先月の此頃、此晩の楽しさと較べて感慨無量なり。夜半過ぎ決死隊の者、馬来田少尉の死骸を持つて無事引揚げ来る。中隊長殿は行方不明なり。

十月十一日

(日付ハ欄外ニモ算用数字デ書カレテイル)

寝転ろばり乍ら、一日中敵弾の来る中にて、一昨日の残念話をし暮す。牧野上ト兵病氣にて後退。

夜二組の決死隊出づ。石村伍長以下四名、川尻上ト兵以下四名。

川尻上ト兵準備中流弾にて負傷す。

十月十二日

今日も休み。青山緑、又々腹痛にて後退す。

夜、松田分隊長を長とする決死隊五名孟家宅行き。心配で寝られず。無事帰る。中隊長は依然不明なり。万事休す。

十月十三日

今日は、春枝<sup>(マユ)</sup>と二人で福井へ遊びに行つて、楽しい思ひをしてから丁度一ヶ月なり。故郷の事を思ふ。

夜、敵の迫撃砲旺に落下し来り、恐ろしかった。一分隊の隣に落下、負傷なし。八中隊へ落下し、二名死、三名負傷の報あり。

十月十四日

朝、クリークへ水汲みに行き、敵の迫撃砲の爲め、当田の徳橋と言ふ男即死す。可愛さうな事だ。無為に故郷の事等話しながら一日を送る。

(此処マデハ万年筆デ書カレテオリ、以下ハ鉛筆書キ)

十月十五日

晴天なり。相変らずの生活、たはこの不足をくどき乍ら、飯を炊きながら寝て居る。午後、サイターを二人に一本宛貰ふ。久しぶりにてとてもおいしかった。

十月十六日

晴天なり。相家橋にて休み。河端の兄さん、師団司令部へ行くと聞く。安心せり。山田寛君病氣にて衛生隊行き、極めて瘦せて顔色悪く、後の容体が案ぜらる。

十月十七日

晴。第十三師団交替して孟家宅攻撃を開始す。午後六時より露営

衛兵に服ム。寒し。夜、襲撃来るとの事にて、大隊整理。自分は駐止斥候となつて勤務せり。

十月十八日

衛兵を服務し終り、夜、出発命令来る。

十月十九日

午前七・三〇整理にて出発、東方約二千米の地点、敵の近くの部落へ進出せり。壕を掘りて宿泊の準備をなせり。一間四方に九人と言ふ狭い生活なり。

十月廿日

壕の中にて生活。女の捕リヨ、正規兵の捕リヨ等捕へ来るを見る。

十月廿一日

朝、乾パンの検査あり。兵器の手入れをなす。午後五時頃第三大隊来る。棚池与一君・加藤守君・竹内修三君等に会ひ、互に身の武運長久なるを語り合ひ喜ぶ。

守君より支那たばこ一ヶ貰つたり。

夜は、間近に旺に落下する迫撃砲弾にむおびえ乍ら、狭い壕中に寝る。

十月廿二日

午前八時半出発にて、談家頭に向つて進撃。談家頭は、昨日第一中隊等が占領せる処なり。途中無名部落より、先日の渡河材料を運搬せり。重くて全くへト／＼になつてしまった。

談家頭倒到着前、二小隊第六の兵一名頭部に重傷。竹はじこ運搬の者にも相当負傷者を出し、四分隊の堀田は即死す。

夕食も喫せず、午後五時頃第一線に出動す。南無阿彌陀仏と書いた仏様の沢山居られる寺に到着す。前方二百位の<sup>(米服カ)</sup>地点には、第六中隊が出て居る。佐々木甚作軽傷、井上負傷、小林健二戦死、等々悲報を聞く。

寒い伽藍堂の中に、度々起サレ乍ら夜を明かす。途中夜襲の来る事一、三回、六中隊は此れに応戦、第五の〇も協力、物凄い戦ひあり。戦死傷も相当出でし模様なり。

十月廿三日

内地鯖江を、歡呼の聲に送られてより満一ヶ月目也。第一線に出てつゝ未だ健在を喜ぶ。第八中隊の被害甚大なるを聞く。

第二小隊

十月廿三日

午前早く八中隊と交替す。八中隊は悲惨な状態となつて後退。我等は攻撃前進す。敗残の敵の死者頗る多し。

本日中に一気に二軒家の線近くまで、約千五百米程敵を急追す。

川原・南戦死、負傷数名あり。

俺は今日分隊長と共に架橋を行つて活躍せり。

十月廿四日

久しぶりに飯を炊いて食ふ。美味しい事更なり。斥候に出て敵状を見て来る。

午後一時頃より、相馬頭<sup>(砲)</sup>クリークの線の敵を攻撃前進。北川正志君、柴本伍長は戦死、負傷十名位。第二回目の斥候として、クリークの川中・水深偵察に行き、敵の狙撃を受けて、俺も今少しで

戦死する所であつた。手に少々の傷をす。本日中は攻撃不可能にて、種々作業をなし夜来るを待つ。

夜半、工兵架橋に来る。

午前五時を期して渡河突撃せんとす。成功せば、第五中隊は相馬頭クリークの一番翳乗りなり。

あゝ我身の運命も数刻に迫る。しつかり頑張るべきだ。

唯妙法を信じ、妙法に身を委せて、大君の爲めに。

夜半の月は皎々と照り、銃声こだまして物凄き感あり。

クリークの水は、珍しくも音もなくユル／＼乍らも流れて、敵は渡河準備を知らざる如し。

故郷遙かに思ひ出し、皆んなの顔を浮べて見る。サラバ。

然し、現在の気持ちたるや、平静なものなり。

南無妙法蓮華經、日本軍に幸あれ。

二十五日午前二時半月明の下に、

相馬頭クリーク左岸の壕中にて。

(此処マデハ鉛筆デ書カレテイル、次カラ筆)

十月廿五日

午前六時半突撃命令下る。工兵の強行架橋、続いて第三小隊第一分隊、第三分隊、軽機の順序に敵前渡河、攻撃前進。

朝霧は深く立ちこめて、払暁攻撃には洵にふさわしい模様なり。

既に逃げたかと思ふ位静粛であつた。敵も突撃と知るや猛然火蓋を切り、茲に壮烈なる攻防戦は開始された。

我々は猶子を待たず突撃を敢行、有無を言わず敵陣を奪取せり。

然れ共、敵もチャンコロ乍ら正規兵の精銳、数十発の手榴弾を投げつゝ退却、危険な事此の上もなし。

斯くする中、敵は勇敢にも逆襲に出づ。仁王立ちとなつた数十名の敵は、必死の勢物凄く、手榴弾を片手に振り上げ、片手に銃剣、青龍刀を握りて突撃し来る。此れには如何な我々も一寸驚かされた。然し、誰言ふとなく、分隊全員一斉射撃を浴せかければ、見る／＼中に打ち倒され、逃げる奴、傷つく奴、面白き程なり。

斜左の土まんじゆ(ついで)の銃座の下に居る敵は、中々退却する気色も見えず、時々狙撃をなす等我々の腦(まへ)の的であつた。俺は勇を振るひ、単身散壕づたひに行つて見れば、二名の兵が横を向いて腹座つて居る。すかさず約五米の処より二発の弾を打ち込めば、二名共前のめりとなつて倒れてしまつた。然し、もう一名はどうしても中から出て来ず、射ち取る事が出来なかつた。

後は陣地を確保しつゝ、敗残の逃げ行く敵を射ち乍ら、正午頃まで居る。

正午頃、続いて追撃命令下り、第二小隊第一線にて敵を射ちつゝ急追す。約相馬頭クリークの線より千五百米前進し、学校のある一部落に入る。第五中隊のみ特に前進せる為め、敵弾は四方八方より来り危険千万也。昨日来丸一日ぶりにお茶を湧かして飲み、咽喉をうるほす。

判明せる戦死傷、太田・棟頼・川端・内田等、我が分隊の藤崎も負傷と聞く。其の他十数名以上ある見込。

十月廿五日午後三時、学校の在る部落にて敵弾下にて記。

此の筆墨、敵兵の雑ノ中より拾ふ。

本日の戦斗にて、水冷式MG及彈薬・小銃等多数分捕つたり。

夜、家屋内は、敵弾飛来し危険極りなし。故に、外に壕を掘り、一夜を明かす。

(欄外)「午後六時頃、敵ハ哀調を帯びたるラツパの音と共に、

ワイ／＼騒ぎ乍ら夜襲来る。然し、驚くに足らず。」

十月廿六日

大阪の地を離れ、故国を去りしより満一ヶ月目也。補充隊約四十名来る。戦友西沢君、谷口上卜兵等の顔見ゆ。皆恐しさうなるも元氣なり。小隊長代り海道少尉。

午前七時再び前進開始。一時藪の敵の逃げたる壕中にて前方警戒。第六中隊左第一線南方部落占領、第七右第一線未だ我々の線まで進出せざるが如し。我五中隊は中幹第一線、尔後予備隊となる予定。此の記事書き居る中にも、戦友達倒れ行き、悲しきうめき声聞ゆ。昨夜等負傷兵のうめきの叫びに、幾度となく夢破れたり。

十月廿六日

午後四時半出發。先づ第六中隊の占領せる張家口(橋)に向つて前進、続いて前の部落を第一線となりて攻撃前進す。多数の戦友達バタ／＼と倒る。占領後部落内の掃討をす。夜、月ハ出せず暗し。突如残敵は、クリークの前より手榴弾を投擲し始む。多数友軍の頭上に落下し、小銃弾と共に負傷相継ぎ、小倉準尉・松永上卜兵等も負傷す。

十月廿七日

(日付ハ欄外ニ書カレテイル)

恐怖の中に一夜を明かす。午前七時、学校ノ線まで後退し、予備隊となる。命令により後退を開始す。名葉其の直前に腹部を負傷す。我々ハ小倉準尉を運ぶ途中、敵の側射を受け、再び小倉準尉ハ左足貫通銃創を受く。痛がり、全く閉口せり。

俺ハ勇を振り背負つて張家口まで来り、担架にて学校へ帰る。

午後三時出発の予定なりしに、負傷兵多く、兵隊帰らず、出発出来ず。第一、第二小隊長、広瀬・長谷川・大久保・上野等も負傷せり。其の他負傷・戦死数限りなし。現在の所、第一小隊十二名、第二小隊来らず、第三小隊十三名の少数なり。松永君も再び足負傷。大隊本部にては、島君腹部貫通にて生命覚束なく、松原君負傷。見習士官より凶ノを預る。上野を松田と二人で後方へ下げる。孟家宅以来の大打撃にして、収修の道なく心配なり。今まで無事居りし事思へば、全く不思議なものなり。此れ皆妙法のお蔭と感謝の他なし。此後共御加護賜り度くお題目を唱ふ。

### 南無妙法蓮華經

十月廿六日午後七時記。

戦友達悲壮なる話にて騒がし。

十月廿八日(ココカラ十一月廿五日迄日付ノ上ニ〇印ヲ付スモ省略) 午前七時半中隊は整列、総員六十四名也。全く淋しきもの。八時聯隊命令により行軍を開始す。大きな道に出で自動車を見る。電柱を見、真如の無電塔を左に見て南進、間も無く待望の鉄道線路を横切る。線路は全部外され惨憺たるもの。然し、此れを見て、いよ／＼支那軍も破れ、戦争も大詰に来た感があり、愉快であつ

た。午後一時頃張家村(倪家橋)に到着。昼食後再び元帰り、背ノを取りに行き、午後九時過ぎ帰る。今日の里程約六里以上、非常に疲れたり。

十月二十九日

午前七時起床。孟家宅及仙師廟(子)附近の戦場掃除に、岩本・三島伍長以下十名行き、我々ハ兵器・被服の入手をなす。午前十一時再び命令により、第一大隊と交替、第一線に参加する事となり、武装を整へる。今度ハ蘇州河方面の敵を攻撃、同河を渡河致し、尔後右向けをして、南翔攻撃戦に参加と聞く。

出発間際に、俺と辻一等兵の二名ハ、戦場掃除者の連絡の爲め、此処に残る事となる。二人で美味しいものを作り夕食をすます。午後五時頃三島等帰る。沢山御馳走をして待ち居りし為、非常に喜ぶ。夜ハ八名仲よく戦功話に花を咲かせ乍ら、楽しく休む。今日、家と春江と二通便りをなす。

十月卅日

午前七時半までゆっくり休み、朝食をおいしくいたゞき、三島等を八時半頃送り出し、再び休む。お昼頃、田村部隊と云ふ九師団配属の九州の野砲隊来る。廿四日付の新聞を見る。

彼等の話によれば、左翼の一〇一師団方面ハ戦闘終り、早や凱旋気分で、戦勝祝賀会等しやれ込んで居る由、一寸腹が立つ。

岩本等午後七時頃帰り、宿泊せり。

十月卅一日

午前中休み。午後一時半、夏家頭の中隊の位置に行く。留守中、

中隊の編成替えあり。俺ハ懐しの第三分隊と分れて、第二分隊に行き分隊長となる。責任益々重し。

(欄外)「二分隊全員、辻除、本隊」

松田伍長持が悪くて寝て居る。早々全快を祈る。

夜、俺が長となり、□の位置に至り、寺田少中尉の指示を受け、明日の渡河材料を日本の所まで運搬せり。午後十一時半帰る。

十一月一日

午前五時二十分起床。中隊全員幾河橋に至り、再び帰る。再び武装後其処へ行き、それより工兵隊第一大隊と協力し、舟ヲ部隊の先頭となりて川岸まで運ぶ。

(欄外)「二分隊、辻除、全員」

午前十一時、河岸より約百米の地点に至り、時の迫るを待つ。午後十二時半、運搬命令下る。此れまでに於ける友軍の集中射撃の物凄き事、壮絶なる状況は、全く言語に絶す。天も黒く見えない位なり。

俺は第一班長となり、舟運搬の任務完了せるに、谷口伍長の率ゐる第二班帰らず。心配せる処、果して水上進一君即死、田中重傷、内田軽傷す。実に大した犠牲なりき。俺は小隊長の命により、戦死の現場へ敵弾を犯して見に行けり。後、第六中隊の後方を続行渡河を行ふ。工兵の労苦又大したものなり。午後一時四十分、無事渡河を終り、向岸の死角に取りつけり。此の記事を書く、時に午後二時四〇分。敵弾頭上を飛び、友軍の砲弾又射程延進をなし、彼我の銃砲声いんくとして聞ゆ。此後の吾等の行動や如何に、

此後の運命や如何に。俺には只、忠の一字と妙法の信念あるのみなり。

敵の壕中にて午後七時まで暮し、午後八時前の張家宅の部落に入り、聯隊の予備隊として歩哨を立て、一夜を明かす。

十一月二日

夜半、支那の正規兵一名捕へたり。朝、伊藤少尉首切りをなす。余りうまく切れず。一日中弾の中にて暮す。雨はしよぼく降り出し、第一線の労苦思ひやらる。

夜十時頃、俺の歩哨掛中、友田・中西両名にて敵一名捕へたり。

今日午後、石村・蓬生・水上・中西達、患者・負傷者五名帰隊せり。

十一月三日

菊香る明治節の佳き日なり。内地は嘸かし戦勝祝賀等にて、賑やかな事ならん。我等はろくく飯も当らず、雨と弾に淋しい日である。夜明けて見れば、三分隊の前田千松とて、今年卅九才の補充隊より来し兵、便所に行きて倒れたり。洵に可愛さうな事なり。敵の陣地も今度ハ仲々堅固との事なり。永久トーチカ・陣地等あり。我軍も相当苦戦ノ模様と聞く。

午前十一時、命令により第一線参加となり、十二時四十分出發す。任務ハ、歩三六の左第一線第二大隊の左第一線第七中隊の左へ出て、八字橋攻撃に際し、敵の右側背を攻撃するに在り。

(欄外)「中西・友田歩哨ニテ捕リヨ一名」

先づ、大隊本部のある二軒家に取りつき、それよりサイ家宅(蔡)に向

つて前進す。途中にして多数倒れ、其の爲め前進困難となる。ク  
リークの横に敵弾を避けて停止する事、二時間半に及ぶも尚前進  
せず。前には負傷者うめき居り、敵の迫撃砲弾・小銃弾飛来近く  
に飛来し、雨は降り出し心細し。今後如何をなるや、妙法の御加  
護垂れ給へ。

### 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

十一月三日午後三時三十分雨中にて記。

### 天皇陛下万歳 大日本帝国万歳

### 皇軍大勝 析三軍之将兵武運長久

### 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

午後五時、前の部落へ前進を始む。再び敵弾激しく、途中河内玄  
同君頭部をやられ即死、角平明君又足を負傷す。

暗くなる頃到着。第七中隊三五聯隊MG六中隊等居る。壕を掘り、  
寒さにふるへ乍ら一夜を明かす。明治節の佳き日を。

十一月四日

午前五時半頃、敵逆襲し来る。七中隊の主力を以て撃退す。明け  
離れた頃、敵入り込んだとの事にて皆騒ぎ出す。

(欄外)「使役、島田」

正午頃より、八字橋の攻撃開始す。無事部落に取りつきし所、友  
軍の砲弾旺に落下し、危険極りなし。北川上卜兵遂に右腕負傷せ  
り。尚部落内には残敵多数居り、道路にそひ縦射し、中隊の連絡  
切れる。石村伍長負傷せり。

又友軍の砲弾落ち始む。敵は十九路軍系と聞く。度々逆襲を企て、

全く日本軍以上、死物狂ひの抵抗<sup>振</sup>なり。

あゝ何時になったら飯が食へるやら、毎日干パン暮し、腹の虫も  
泣いて居る。蘇州河を渡って早や四日、戦争は何時まで続く事か、  
一日も早く平和の来るを望む。此れが本当の心の底だ。

然し、大君の爲めに憎みても余りある支那軍を、徹底的にやっ  
けねばならぬ任務があるのだ(午後三時記)。

部落左端に出で陣地に着く、時に午後四時頃。敵ハ逆襲を度々企  
つ。敵弾雨霰と飛来す。腹が空ってたまらない。五時頃おむすび  
来るも二人に一ケ、而も腐敗して食べられない。お茶もなく、今  
日は全く戦ひがいやになってしまった。

いろいろ考へて見るとき、到底命永らへる事の出来な事<sup>(い脱)</sup>を痛感す  
る。故郷の山河、懐しい友の顔、恋しい彼女の姿、在りし日の家  
に居た己の姿を思ひ浮べて一人涙ぐむ。淋しい事だ。空は段々晴  
れて来た。友軍の飛行機は銀翼を輝かし、砲兵の集中射撃は物凄  
く、前の部落へ落下する。然し、何故か俺の心は朗らかなりき  
れない。こんな事では駄目だと思ひ乍ら。

十一月五日

昨夜ハ予期して居た敵の夜襲も来ず、唯敵の迫撃砲弾が少々来た  
のみ。大竹藪の壕中に比較的よく休まれた。

午前十一時頃、中隊指揮班岩本等と患者少数帰隊す。丸五日も人  
員整理に名を借り遊び居るとは、全く無神経も甚しと云ふもの。  
小隊長よりサンク、叱られたり。現在、未だ此の八字橋の右半分  
の掃討行ハれざる爲め、攻撃開始の時期は未定なり。朝、少々の

米を炊いておかゆを作り食べ、大いに元氣つく。最後の五分間、大いに奮闘する覚悟なり。陛下に捧げた此の身体、微力たりとも御奉公に励み、君国に尽すべきなり。妙法に身をお任せして。西島惣作行方不明、心配なり。十一月五日午後一時記。午後五時頃より、陣地を引上げ部落内家屋に入る。夜、大瀬准尉病院より帰る。楽しみなり。雨降り、屋根ハ洩り、全く困る。

十一月六日

久しぶりに米一合程給与さる。芋もあり、おいしかった。

昨夜来、八中隊が八字橋右端、鉄工場附近の敵を攻撃するも奪取出来ず。II大隊<sup>施</sup>世家衛攻撃進展せず。

西島惣作後方に居る事判明す。無神経なり。

少し暇になり、皆んな呑気に凱旋だ、停戦だと騒ぐも、未だ仲々だ。午後五時命令下り、第八中隊ハ、明七日期、鉄工場附近の敵を攻撃、陣地奪取後、大隊ハ世家衛攻撃する筈なり。此れより約千米にして道路に出で、いよ／＼外国租界となり、いよ／＼我々も最後の戦斗であるかも知れない。最後の御奉公を励むべきである。敵の最後の抵抗物凄し。然し、我等の猛追撃は更に猛烈なり。午後、盒<sup>マゼ</sup>合取りに行き、河内玄玄の遺留品取って来る。

十一月七日

夜明頃雨降り出し困る。

午前八時頃、八中隊鉄工場附近の敵掃討終り、我等に世家溝<sup>マヅ</sup>の敵攻撃の命下る。午前十一時半、雨の中を八字橋右端に大隊ハ集決、午後十二時半より攻撃開始す。此れより先、明治節の御下賜品と

して、するめ・みかん・お菓子を戴き、おいしく食す。

一時より砲兵集中射撃始まり、一時半攻撃前進。途中左前の寺院に敵居るとて、此れに突撃す。途中島田勇松君戦死、長谷川淳君負傷す。又、坂本君も首に軽傷す。可愛きうな事なり。今日は第一大隊六中隊も、世家溝に取りつく事出来ず、我々は寺に一夜を明かす事となる。体はずぶ漏れ<sup>マゼ</sup>、寒き風あり。今晚は夜襲あるべく心細し。

(欄外)「糧秣・彈薬運ビ使役、道念一回、友田二回」

◎島田勇松君遺留品、

一、金十九円五十六錢也、

お守袋一 認識票一 我れ預りおく。

十一月八日

寒さの中に夜を明かす。夜半十一時、敵我を包圍の形勢あり。一寸緊張す。然し、夜襲は来ず。夜明けと共に二階より徹底的に射ちまくる。敗残の敵は枕を並べて打ち倒る。寒さも朝飯も忘れ、最も痛快なる射撃であつた。後、大隊長も来たり、第五中隊ハ大いに面目を得たり。

(欄外)「彈運ビ、友田・中西二回」

午前十一時頃より、第八中隊突撃する事となる。我等ハ二階より援護射撃。敵の逃げ出した事、約二百名位。然し、勇敢にも逆襲<sup>ヒ</sup>に展ずる者、跳み止まって手向かふ者、八中隊も相当の損害ありし模様なり。

此の戦斗に於て、道念明君頭部を射たれ名誉の戦死。遺留品、認

識票・手帖・オ守等なり。とうとう我分隊も長以下三名となる。午後五時、中隊ハ再び此の寺院内に宿泊するとの事にて、吾等準備せるに、六時命令代り、前の世家衝に前進と決る。第一小隊ハ八中隊の増援、第二小隊のみII大隊本部と共に行く。敵弾相変らずなり。

(欄外)「弟より手紙を受取る。嬉しかった。」

部落内は敵未だ退却せず、家屋内ハ危険極まりなり。外に壕を掘りて、中西・友田と俺と三人、今は亡き島田・河内・道念君等の事を話し乍ら、露営の夢を結ぶ。三日月ハ淋しく、空ハ降るやうな星空だ。故郷遙かに思ひ出す。敵の夜襲も来らず、案外暖くて、楽しく凱旋出来て故郷に帰り、春江と二人嬉しく語り合った夢を見た。

十一月九日

十一月の夜明け、流石寒さきびしく午前六時夢醒める。敵弾の音もしない。早くより火を焚き、馬鈴薯を掘り、味噌汁をして、おいしく朝飯を食す。

午前八時出発となり、前進を始む。昨日まであんなに頑張って居た敵も、今朝は更に其の影を見ず。戦備行軍を以て、待望の共同租界軍工路を南進、追撃す。途中時々、敵敗残兵の射撃を受けしも大した事もなく、正午無事師団の進出線まで約一里追撃を終る。天気はよし、着いた所は丁度奇麗な庭園にて、赤青とりくの花木があり、遠くで時々彼我の銃砲声が聞ゆるのみ。空は、友軍の飛行機が銀翼を輝かし、ほんとに気持良し。

唯残念なりしは、同郷の青山、拳銃をもってあそび居りしMGの兵に射たれ、足に負傷せり。戦斗はもう終りだらうか、何だかそんな気がしてならない。午後一時、西島上ト兵帰る。腹立てども安心せり。

小春日和の秋晴れ、風さわやかにして、右の方にては万歳を叫んで居る。

将兵一同の朗らかな顔々、昨日までの戦斗、今日の和やかな状景、まるで夢に夢みる心持、あゝ有難い事だ。武運良く生延びて、楽しい気持が味へる。此れ皆妙法のお蔭である。今後如何なる事か、更に新任務の為め戦斗するか。南翔・嘉定戦線ハ？ 然し、案ずる程の事なからん。或ハ此れにて我等の戦斗終りやもわからぬ。更に妙法の御加護給り度く、信心に致すべきだ。

(欄外)「西島使役二行ク」

十一月十日  
午後五時頃金家湾に至り、久しぶりに足腰伸ばして寝に着く。

十一月十一日  
午前七時起床。何処からとも無く停戦の声聞ゆ。ほんとに停戦気分だ。午前八時半ヨリ、夏家橋<sup>(頭)</sup>まで背ノを取りに行く。戦ひの後を見て感慨無量なり。敵の死骸ハ正に累々たり。今は亡き、河内・島田・道念諸君の死体を埋葬して帰る。

朝ばらから手紙八本も来る。恋しき春江の便り、心から嬉しく読む。一日中休み。午後、第二回補充隊兵来る。八十余名也。

(ココマデ筆デ書カレテイル。以下万年筆)

十一月十二日

朝、起床と同時に保健体操。朝食後中隊の編成替えあり。俺ハ第一小隊第三分隊長を命ぜらる。

午前十時、出発準備命令下り、午後二時前出発。黄道鎮<sup>(遼)</sup>に向つて行軍を始む。途中雨降り出し、ぬかるみの道全く閉口す。一部落に午後五時半到着、宿泊せり。竹中一名来らず、心配す。

十一月十三日

午前七時出発、雨降り上り涼しくて行軍にはもってこひ。

午後二時、蘇州河の線、黄道鎮の対岸に到着せり。

敵ハ全く逃げ失せ、敵弾の音一発も聞かず。中隊長の話では、全部南京方面まで逃げ、既に戦意無しとの如しとの事、全く万々才なり。十一月十三日午後二時半記)

(欄外)「湯谷最も元氣也」

(ココマデ万年筆デ書カレテイル。以下筆)

午後四時舟により渡河、黄渡鎮より約二千米西北方の、小李花村に宿泊せり。米は支那人より貰ふ。馬鈴薯を煮て夕食す。竹中帰る。

(欄外)「染沢・東、使役、夜」

十一月十四日

午前六時半出発、天気晴朗なれ共、暑くてやり切れない。道程約五、六里なれ共疲労甚し。午後六時、大隊本部の位置より更に約一里前進、一寸した町に到着。既に第十一師団追撃前進駐屯しあり。支那兵の逃亡せる跡にして、米・酒・醬油を始めあらゆる糧

秣あり、食事には不足せず。立派な家に一ヶ分隊入り、二階の寝台上にゆつくり休む。今日のどぶ酒甘くてほんとおいしかった。此んなうまい酒未だ飲んだ事なし。

(欄外)「夜、砂原、使役」

十一月十五日

午前四時半起床。五時四十分楽しかった此の町に別れ、大隊本部の位置に集合、旅団本部と行動を共にし、再び重い背ノを背負ひ行軍を續く。敵弾□□□□良きも、全く毎日／＼の行軍に疲れ果てたり。南翔一南京道を北進す。第一〇一、第十一、第三等各師団が、一本の道を前進、重、野砲、行李等道一パイなり。午後に至り涼しくなり少々曇る。

午後六時、旅団司令部の位置に到着す。竹中再び落伍。

夕食は豚の塩汁、おいしくいたゞき休む。

(欄外)「小林、衛兵」

十一月十六日

午前七時出発、雨降り出しぬかるみを行軍。第二大隊前兵、第六中隊尖兵、56 i 前衛、吾等は旅団と行動を共にす。歩くに橋無く、休憩もなく、疲労甚し。殊にiA・MG等、馬を持ち居る者の苦勞可愛さうなり。夜七時、遂に今晚は露営。夜半より雨降り出し、全く追撃も苦勞なり。茲数日糧秣の支給もなく、皆支那人の微発米。鶏を殺し、味噌を取り、飢をしのご。支那兵以上なり。今日、目標たる崑山遙かに見え出す。

〃何処まで続くぬかるみぞ 三日二夜食もなく 雨降りしづく

鉄かぶと<sup>(ツツ)</sup>

全く唱にある通りの状況也。

(欄外)「不寝番、染沢・東・八田」

十一月十七日

雨の中に眼を覚まし、昼食の炊さんもせず慌しく出発、ぬかるみを崑山に向ふ。約一里を四時間以上もかゝって、工兵の架橋を渡り、午後二時半、崑山城に入城。山ハ上海上陸以来最初。小さい山にして、仲々景色の良い公園なり。菊花香り、芝生あり、気持良し。

敵兵の死骸もちよい／＼見受けらる。

昨日あたり敵ハ、蘇州方面に逃げたるが如し。いよく／＼今から崑山の町に入り、二、三日滞在の噂あり。少しは休まぬ事には到底やりきれない。今日で丸六日間の追撃行軍である。

午後四時崑山に入城、大きな家に宿泊せり。微発を行ふ。にわとりを食す。

暖く安らかに行軍の疲れを直す。家の立派、大きなのに驚けり。河端の兄さんに会ふ。徳橋君よりたばこ二ヶ貰つたり。

(欄外)「十六日、竹中入院」

十一月十八日

今日は休みとばかり、呑気に寝ては御馳走して食し、微発を行つて豚を食ふ。午後四時半、突如出発命令下り、皆々うろたへたり。五時出発、第二目標たる蘇州に向ふ。大きな道路、鉄道を歩き、苦勞しながら午後十二時頃、雨にぬれ、寒風にふるへて正儀站到着、大休止を行ふ。

到着、大休止を行ふ。

十一月十九日

午前七時半整列、鉄路伝ひに蘇州に向ふ。相変らずの寒降りだ。全くいやになってしまった。約六、七里、疲勞困バイして、夜晩く九時過ぎ蘇州に入城せり。領事館あり、大きな立派な町なり。塩くどい豚汁を食し、午後十一時頃寝に就く。

二十日

(日付ハ欄外二書カレテイル)

夜明けと共に微発に歩き、砂糖・醬油・噌味・支那酒等多くあり、久しぶりに甘い目に合ふ。雨ハ依然止まず、今日街の家より紙幣六円、銀貨数枚探し出せり。マーヂャン・墨等持ち帰る。正午頃、突如出発命令下り、慌しく雨の中を無錫に向つて追撃前進。雨は益々猛烈を極め、寒さ加わり、腹の底まで漏れ果て、夜晩くまで歩きつゞけ、午後十一時半望亭站到着き、衣服を乾す。

十一月二十一日

午前六時半出発。朝飯も食わず、昼食も炊かず、極く忙<sup>(マ)</sup>の出発だ。昨夜来の残敵ハ、更に退郎却の氣振無く、前進困難となる。第一小隊ハ砲兵の掩護小隊となり、午後一時頃、約二百米前の部落まで前進して、遂に今日の行軍ハ終り。雨は依然降り止まず、敵頑張強也。

十一月二十二日

故郷離れて丸二ヶ月ぶりなり。今日朝早くから雨も止み、氣持良し。

(ココマデ筆デ書カレテイル。以下万年筆)

我分隊一ヶ分隊ハ、山砲観測班と共に第一線まで行く。豚一匹捕へ、水上君と二人で料理して皆にふるまふ。塩気更に無くなる。

午後六時頃、元の位置に帰る。藁の中に宿営。

十一月廿三日

午前六時半起床、出発命令により砲兵の後方を続行。八田泰吉病気の為め居残り。約三里前進せし処、再び敵兵多く追撃困難となる。第五中隊にも第二小隊に於て戦死二名、負傷四名出せり。部落泊り。小林・湯谷病氣。

(欄外)「八田残ル」

十一月廿四日

敵退却せず、此の部落に泊り。米塩無くなり、米ツキを行ふ。水牛を殺せしも、かたくて食へられず。

十一月廿五日

午前八時半出発、無錫に入り中隊主力と合す。街中をあち行きこつち行きする中、一名戦死、二名重傷せり。城内の敵の掃討終らず、危険千万なり。午後四時頃、城外の民家に入り宿営せり。米・味噌・酒は不自由せず。

十一月廿六日

敵ハ依然逃げ切らず、山砲第一大隊を以て掃討中と聞く。出発準備のみ。小林・湯谷・染沢診断受けさせる。大瀬准尉にぼろくそに叱られしと聞く。分隊長として情無いやら残念やら、大瀬の馬鹿野郎がにくらしくてたまらない。現役時代から俺の事には一々物匂をつける男である。人物としては決していばる程の男に非ず。

清水中尉中隊長となり来る。

十一月廿七日

午前六時半出発。昨日あれ程射撃し抵抗し続けたる敵も、今朝はすっかり逃げ失せ、弾の音一発聞かず。先づ第五中隊尖兵となり、南門より城内に入り、西門外に至り宿営と定る。湯谷・染沢入院。十一月廿八日

昨夜午後六時より、梅園まで斥候として行き、帰隊後再び梅園に至り、第六中隊と連絡をして帰る。午前二時半なり。昨夜来、約八里の行軍なり。午前四時出発、梅園を経て宣興に向ふ。生れて始めての辛い行軍なり。約十里行軍、午後六時到着せり。

(欄外)「山本・水上、斥候二回」

十一月廿九日

午前六時出発、先遣中隊となり、常州に向ふ。足の痛さをこらへて歩く辛さ、午後三時常州に入る。砂糖・米・酒いろ／＼あり、楽しく休む。

十一月三十日

上陸以来九ヶ月ぶりなり。今日は休み。三十貫程もある豚を殺し、すき焼にて一ぱい飲むやら、ぜんざい・ぼた餅等好物揃ひ。

十二月一日

午前八時出発、金壇に向ふ。約十里と聞く。約六里行軍して宿営せり。

十二月二日

午前九時出発、金壇へ午後〇時頃着。寒風の下に入城を待つ。此

処には数日居るやうな様子。或は警備やも判らず。

(ココマデ万年筆デ書カレテイル)

三 覚書

\*丹生郡越廼村蒲生

金沢市醒ヶ井町三〇

金沢市材木町三ノ目

石川県河北郡高松町横山

滋賀県場(C.A.)

\*二ノ一 西島惣作

二ノ三 笹島強

二ノ四 中西国男

\*一小隊三分隊

長 山本 武

現一 品谷菊馬

コ一 東 作栄

コ一 馳川一次

コ一 八田泰吉

コ上 湯谷奥次郎

コ一 田中峰蔵

\*十一月六日 第二分隊編成

小林末男

東 作栄

染沢次雄

砂原善作

二ノ二 友田智道

水島 隆

塚谷新五郎

コ一 小林末男

ヨ一 辻正 威

コ一 染沢次雄

コ一 砂原善作

コ二 竹中 栄

山本 武

長 山本上卜兵

ヨテ 長谷川淳

上 中西国男

友田智道

上 坂本 栄

ヨ二 水島 隆 十一月九日来ル。

\*第三分隊編成

第五中隊長并大隊副官

小隊長 伊藤少尉

第二分隊長 山本上等兵

ヨテ 長谷川淳

十一月一日背中顔負傷

ヨ上 西島惣作

後一 島田勇松

十一月七日戦死

後一 友田智道

ヨ一 辻 正威

十一月四日現在員長以下六名

十一月四日現在員長以下六名

\*九時より十一時まで、吉野・西島・北川・島田・河内・友田。

(ココマデ鉛筆、以下筆)

ヨ上 水島隆 昭六

後一 道念 明 十一月八日午後一時戦死

□上 坂本 栄 十一月七日負傷

キ上 中西国男

(ココマデ筆、以下鉛筆)

\*第二分隊編成

長 山本上下兵 昭八

負テ上 長谷川淳 昭六七

負テ上 北川捨志(アタ) 昭九

□第□□上 西島惣作 昭七

戦一 島田勇松 昭三

戦一 川内玄同 昭八

病一 辻 正威 昭九

一 友田智道 大正十

負一 角平 明 昭六

一 笹島 強 昭九

\* 衛生隊

(写真4)

(裏表紙見返し)

(コノ部分ハ万年筆デ書カレテイル)

「日本兵戦死傷多数

中国兵日本兵倍有

四

戦争両国最不辛

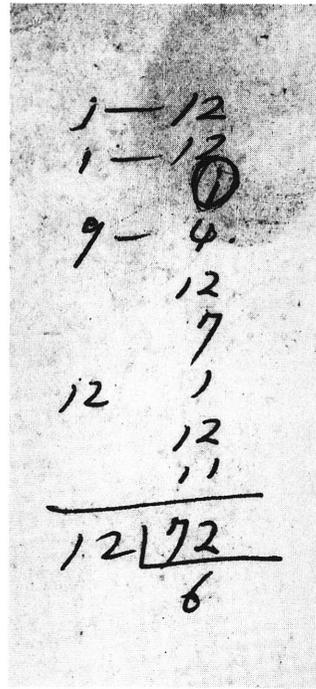
今後 中国 共和—共発展

日本

「四」ハ鉛筆テ後筆。ナオ、コノ部分ハ武ノ手デハナイ、

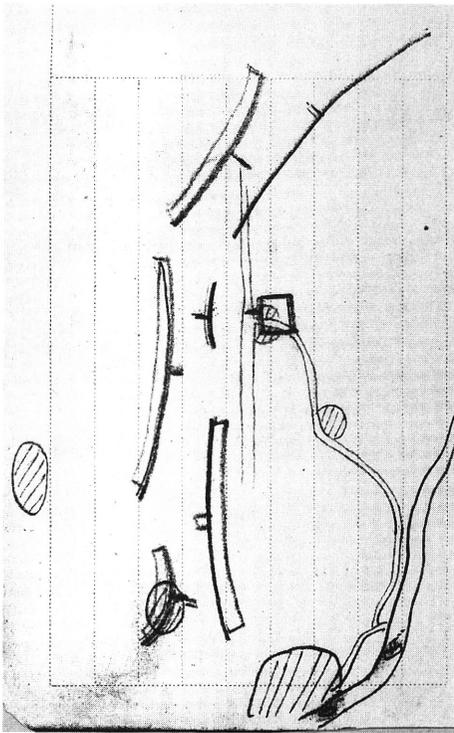
或ハ筆談カ。

(写真1)



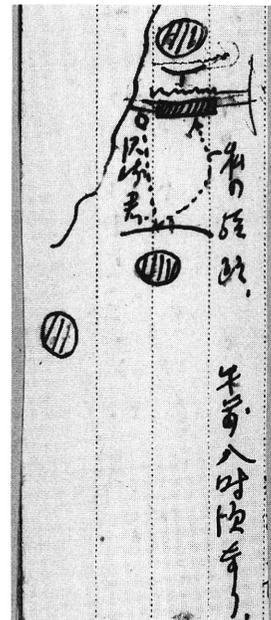
(扉ノ部分ニ書カレテイル、万年筆)

(写真2)



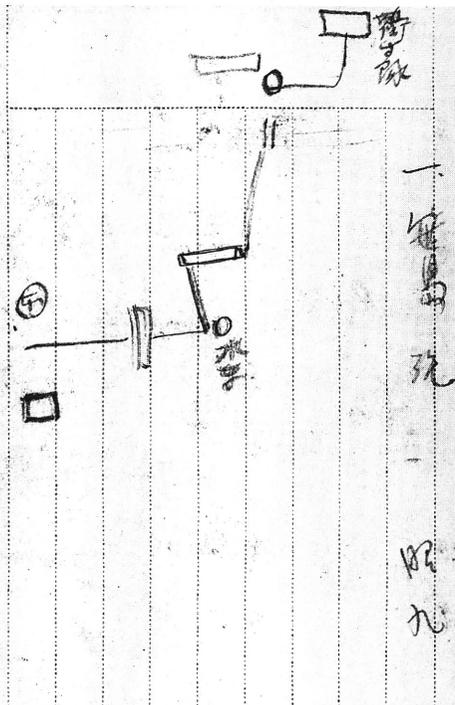
(概ネ左側ガ赤鉛筆、中央ガ青鉛筆、他ガ鉛筆)

(写真3)



(万年筆デ書カレテイル)

(写真4)



(鉛筆デ書カレテイル)

## 一 解題

形態…第一冊より小型、ごく普通の手帳、表紙とも五二枚。タテ一〇・五×ヨコ六・五cm。日記の部分は横書。左開き。四一頁まで下部に頁数を算用数字で記入(本文では省略)。覚書は手帳を横にして縦書、手帳の最後から書かれているので、本稿でもそのように印刷した。

表紙…緑色の紙表紙、表紙は裏表紙のみ残る。印刷、自署なし。  
 内容…金壇に着いた昭和十二年十二月二日(承前)から、南京入城後、十二月二十四日南京から南翔方面へ転進、劉河鎮に入った十三年一月十日まで(十日は日付のみ)。したがって鯖江三十六聯隊は、十三年の正月を南京で迎えなかつたことになる。日記は六二頁、覚書は三一頁(空白頁を含む)、間に一〇頁空白紙がある。日付は上部欄外に算用数字で「12.2」のように記されているが、本文では「十二月二日」のように直した。武が戦闘に徐々に慣れてきたことが窺われるが、「光華門入城」と欄外に特筆大書した部分、「筆にて話し」た欽忠兄弟との交流(一月二日、写真7・8)や覚書の武の手以外の部分、まま見られる戦友との軋轢、十二月十一日の記事などが、とりわけ興味深く思われた。なお、十二月八日から九日は誤植や錯簡ではなく、一日毎に改頁していないことを示す。

十二月二日 晴

(扉)「<sup>(道力)</sup>路修膳」

午後四時頃金壇城に入城せり。命令により、今後徴発等に関し注意事項あり。

少くも二、三日以上滞在の噂あり。早く家へ這入り、あつさりしたお菜を作つて夕食を喫す。

奇麗な家でありとても樂し□。

第二分隊では、蓄音機を鳴らしてチャン酒を飲むやら、全く□□警備気分である。

豚一頭徴発し来る。

柔いふとんを持ち来り、□を□□□心のびくと寝に就く。

(欄外)「第三分隊不寝番」

十二月三日 晴

川内等戦死してより丁度一ヶ月目なり。心静かに黙禱を捧ぐ。

午前七時起床。にわとりの汁で朝食。それより昨日の豚を料理す。

午前十時頃、突然聯隊の衛兵服ムの命令来り、慌しく準備す。十

時半、肉のすき焼も食ふや食はずで出発せんとするや、今度は、

旅団は速に南京攻撃、十二時四十分出発との命令来る。此れには

皆々驚きたり。あわて、準備を完了、砂糖を□□□<sup>(持もカ)</sup>の、豚肉を持

つもの等大変だ。中には洗濯をして、未だ乾き切らぬのを背ノに

つけるやら、全く大騒ぎして出発す。

道は良好なるも今日は又今までにない良い天気、而も暑くて汗は流れ、歩度早く、とても辛い／＼とこぼしながら行軍を続ける。段々山に近づき、低い乍らも坂道にかゝる。日は暮れかゝり全く困った。午後六時半頃小部落に入り、持って来た豚肉とあり合せの甘藷と菜とでお菜を作り夕食。寝に就く、午後十時頃。

十二月四日 晴

午前五時半起床。六時半出発、天王寺に向ふ。山道多し。然し、別に大した事なし。大きな道にて気持良けれど、背ノ重く足痛く、相変らず皆々こぼす事。正午天王寺に着。寒さの中に昼食。再び行軍を開始、張べう(張)に向ふ。本日の行程は約十里也。午前中八時半間歩いて十五分間休憩、午後八時間歩いて十五分間休み。皆々疲労其の極に達す。午後七時目的地に漸く到着。夕食の準備、狭くて大困りをす。

十二月五日

午前三時半起床、五時出発。昨夜来の豚汁・さつまいも・ぜんざいと、あんまり沢山食べてつらい位なり。

約一里、細野道を南京に向つて前進せし時、命令により第五中隊は、大行李の掩護を命ぜらる。大行李遅れたる為め約五時間大休止、昼寝をして午後二時半出発せり。途中敗残兵を掃討しつゝ前進す。

河端の兄さんに会ひ、一しよに話し乍ら行軍をつゞける。一少町(一少町)に泊り、にわとり三羽、豚の足一本とですき焼をして食す。河端の兄さんより豆腐を貰ひおいしかった。

今日の行程約三里也。

只今の状況によれば、

1. 句容に残敵あり、第十六師団が掃討中。
2. 其の關係上、敗残兵多しの見込み。
3. 南京に入城せし部隊無し。
4. 各部隊共、南京より約五里―十里の地点に於て、敵に期接し居る由なり。

十二月六日 晴

朝起床と同時にぼた餅を作る。おいしく出来て、小隊長・中隊長にも御馳走す。午前八時整列、八時十分出発、南京に向ふ。午前十一時、一部落に到着せし所、前方に敵兵陣地攻撃して抵抗しあり。昨日日本隊より三十名程の犠牲出たとの情報あり。結局前進不能となり大休止、本晩は此処に泊るらし。大行李・小行李等と共に宿営。かしわ汁にて夕食。夜、三十五聯隊第一線参加の爲め、先発隊来る。

鉄帽を忘れ洵に心配なり。

母上よ、春江よ、許して下さい。

十二月七日 晴

昨夜は晩くまで、豚の油にて甘藷を揚げて食す。とてもおいしかった。朝起床と同時に、鉄帽を探せしも判らず。も早や仕方無し。朝食ハ豚汁。

午前十時頃、旅団命令により旅団予備隊となり、旅団司令部の位

置に行く事になり、午前十一時半出発、第一線近くまで行く。途中敵の追撃砲・榴散弾の攻撃を受く。久しぶりなり。南京もいよ／＼近し。敵もいよ／＼首都を包囲され、死物狂ひの抵抗か。

午後六時、旅団の予備隊として司令部の直接警戒となり、左部落に入り宿営せり。小隊長も共に寝る。さつまいも沢山あり、焼いも・かしわ汁等御馳走す。

第一線部隊ハ既に米も無く、寒さにふるへて居る由、其の労苦が忍ばれる。

焚火をして暖く、よく休む。

◎第三分隊ニ於テ、最モヨク働キタル水上繁雄上等兵、及擲弾筒手トシテ重イ擲弾筒ヲ担ツテヨク行軍ヲ続ケタル品谷菊馬君、第二小隊ニ編入サル。

十二月八日 晴

午前八時起床、にわとりを料理し、朝飯の準備をす。

午前九時頃整列にて、昨日の位置に到り、前進を待つ。暖い日にして昼寝をなし、ポカ／＼暖く氣持良し。

第一線部隊ハ各大隊出て居るらし。敵相当頑強にして、陣地も仲々堅固との事也。依然前進出来ず。午後四時頃になり、出発準備の命令下る。敵の小銃弾俺の直ぐ後に落ち、砂煙を上げしも驚く程の事無し。午後四時頃、前面の敵退却せし為め、出発前進を開始す。第二大隊奮戦の跡を通過す。敵陣地極めて堅固にて、友軍の苦戦の後偲ばれる。

戦友達の死骸累々とし、負傷兵達多数苦しんで居るそばを通る。直ぐ前の町を通過し、約一里以上前進し、小高い岡に差しかかりし時、前方に敵ありとの事にて前進不能。旅団ハ停止、無線ヲ開設す。

此の時突如敵の戦車襲撃し来る。皆々驚き慌て、旅団長閣下始め一兵卒に至るまで、取るものも取り敢へず一目散に逃げ出せり。戦車ハ悠々と入り来り、我軍に向つて銃砲弾を浴せかける。此の時山砲兵勇敢にも一発ブツ旅放せし所、敵の戦車は驚いて逃げ失せたり。何れにしても始めての事とて、一同精神的に受けし打撃ハ相当多き<sup>大</sup>思はれた。

塹壕を掘り、一夜を明かすべく作業す。作業の終る頃出発。前の部落に宿営す。此の晩は少しも寝ずに、戦車の障害物を作る。壕を掘って見る、塩の俵を続積んで掩体を作るやら、大した事であった。午後十二時頃まで一睡もせず作業<sup>つこ</sup>した。

十二月九日

を続く。十時半頃出発、追撃に移り約半里程前進せし時、昨宵襲撃し来つた敵の戦車二台及自動車二台、第七中隊にて捕獲し道路上にある。俺の分隊及運転手一名ハ、此れが鑑視<sup>監</sup>及後程運転して南京に來れとの、旅団の命令により残る。自動車の故障を直し、午前二時頃トラックに乗って出発す。約一里前進せし時、敵弾多くなりたる為め、自動車より降り本隊に合す。

夜明けと同時に再び追撃前進、約一里来り、七亀橋<sup>變</sup>に到る。此れより前、我旅団と共に並行し、右を前進する部隊あり。我友

軍とのみ思ひ居りし所、<sup>(四)</sup>あに計らんや、敵の二ヶ中隊程の兵なり。驚きあわて、射撃開始をなす。第五中隊の一ヶ小隊を以て、八亀橋の敵を掃討し、敵を潰送走せしめたり。

橋の上ハ危険のため通行出来ず、旅団長閣下は戦車にて渡河、我々は夜まで待つて橋を渡つて部落に入る。もう南京は直ぐ眼の前にして、城壁も見え、飛行場もすぐ側である。

今日第三回補充にて来る高橋長雄君に会ふ。とても恐ろしがつて居る。

午後七時、旅団司令部前に到り、附近の敵兵を掃討する事になり、右より第三、第二、第一分隊にて開始せし所、第二分隊に於て瞬く間に四名の犠牲、第一分隊の三島伍長も足に負傷せり。我々も極めて危い事であつた。旅団司令部の隣家に敵兵あり、窓口より狙撃せしものなり。月夜の事とて、かくも多勢やられたるものなり。実に残念である。

第二分隊長田中松男君は、腹部貫通にて生命覚束なし。其の他坂本上卜兵・島崎君・向田君等、実によき兵のみなり。

隣家に火を放し、敵をくすべ出し、後、家の横に壕を掘つて、警戒して夜を明かす。

あゝ人生ははかないもの、今の今まで元気で来り、凱旋を夢みて居りし人々が、不幸な目に会ふとは。月は何もかも度外視して、皎々と照つて居る。一層物思はせる今晚である。

十二月十日

夜中、第一線部隊の銃砲声を聞き乍ら、寒さ身に浸む師走の空の

下に夜を明かす。

依然右方の敵の銃火止まず、道通る友軍は脳みつゞけて居る。第一線ハ、既に弾薬も糧秣も無くなりしとの事、非常なる苦戦に陥つて居ると聞く。

戦車によつて弾薬運搬を行つて居る。第一線ハ余程の激戦と見える。迫撃砲・十五榴等の飛来も物凄し。

午後五時、我々ハ夕食の準備を為し居りし時、後の壁を破り、俺の背ノの米袋を破り、板壁を破つて飛び込んで来たる一小銃弾が、何たる運の悪い事か、砂原君の喉咽部より背中にかけて貫通す。

急いで手当を加へたるも、何分急所をやられたる事とて、次第く息細くなり、顔色青ざめ、約十分間にして事終る。実に可愛さうなる事であつた。

夢のやうとは此の事か。今の今までたばこを吹かし乍ら、面白く談笑して居た者が、狙撃しても命中しない咽喉部に命中して死すとは。一片の花がチラ／＼と無情の風に吹き散るが如し。

今宵の夕食ハ、何となく胸つかへて食べられなかつた。

午後九時頃、中隊長の命により、前の家の附近に至り、敵の重火器、敵弾の方向を偵察に行き、無事帰る。

◎本日の情報によれば、第一、第四中隊は、今朝午前五時、南京城壁に日章旗を立てしとの事。然し、敵は死物狂ひの抵抗のため、城壁占領するに至らず、未だく南京入城とまでは行かぬらし。第一、第二大隊に於て南京の一角に取りつき、

確実に南京城の一番乗りは我三六聯隊である。

新聞記者ハ、フィルムも取り、写真も取り、大活躍である。

十二月十一日 晴

塹壕中に寝れぬ第二夜を明かし、朝食前、砂原君の死骸を敵弾の少い道路前の畑に運び、薪を集め火葬とす。実に可愛さうな事である。

前方及右方の敵は依然射撃止まず、加ふるに敵の十五榴・迫撃砲が、絶間無く飛び来る。飛行場には、友軍の十cm加農砲が出て居るため、一層甚しい様である。

正午頃、昨日掃討せる右方の一軒家に、敗残兵ありとの事に捕へに行き、難なく八名を捕へ来り、砂原君の墓標の前に連れ来り、俺と土本君と二人で、突いて、突いて、突きまくり、瞬く間に八ツの死体となす。又心持の良いものだ。帰ってから皆に話して笑せたのだが、人間も死線を越えればひどいもの、内地に居た頃は、蛇一匹殺すもいや／＼であったのが、同じ仲間の人間、而もピチ／＼して居る、手を合せて拜むあわれな敗残兵をば、銃剣で突き、棒でなぐり、石で頭を割って叩き殺し、その後は、あゝ戦友の敵を討つたと、胸のすくやうな思ひ、その後人殺しをした後は、却って飯がうまいのだから、まあ大した悪者になったと言ふものだ。此んな事は、若し内地へ帰る時があつても、話しも出来ぬやうな事である。

今晚も良い月夜だ。心静かに故郷を伏し拝み、第一線に累々として打ち倒れしと聞く、哀れ戦友達の冥福を祈りつゝ、第三夜を塹壕に寝る。

今晚は、三六正面の城壁の敵ハ、逃げたのかどうしたのかサツパリ音もなし。唯19i正面のみ、相変らず激しい弾の音である。右方は第七i前進し、側傍<sup>わがは</sup>火器ハ沈黙した様である。

十二月十二日 晴

午前七時起床、相変らずひどい霜である。今日はさっぱり敵弾も飛んで来ない。敵もそろ／＼逃げ支度らしい。旅団長閣下も今日は外に出られて、城壁方面を眼鏡で見居られ、沢山の死傷兵が出たろうな／＼と、一口漏らして暗然とせられた。敵のチェッコ・水冷式MG等多数分捕品ある故、今後ハ此れら鹵獲兵器を使用する事にす。

午後、第六中隊にて、飛行場附近より三十名の捕リヨを連れ来り、昨日の場所にて叩き殺す。第五中隊も、次で飛行場附近の敵掃討に行き、二十六名を捕へ来り、此れ又我々の手にて、一ぺんに刺し殺す、なぐり殺す、切り殺す、無惨なものである。

午後八時頃、第六中隊ハ大隊復帰、第五中隊の第一小隊ハ旅団の直接警戒、第二小隊ハ協和橋附近の警戒、第三小隊ハ重砲の掩護の命により、第三、第五分隊ハ七条橋の西端に出て警戒配備に着く。夜、十五榴多数飛行場に到着す。焼夷弾も来る。

明日は、いよ／＼午前十時を期して、歩三六は城内に突撃、総攻撃と決す。然し今晚は、氣持が悪い程静かだ。第一線よりは、二、三日前負傷せる者始め、多数の戦傷兵を担架で運んで来る。俺の見ただけでも約百五十名位通つたであらう。

余りの激戦にデマハ飛ぶ、大した騒ぎである。第一大隊は大隊長

伊藤少佐戦死、全員で二十九名等と云ふ話しもある位である。然し、我聯隊は全滅すとも、名譽ある南京城の一番乗りをなしたのだから、実に本望である。

十二月十三日

相変らずの寒さ乍ら、すが／＼しい気持のする今朝である。

今日はいよ／＼総攻撃の日である。午前七時起き出で、外に出て見る。夜はまだ明け離れず、うす暗い昨夜来の静けさは相変らず。南京城壁は死の沈黙を持し、高く／＼聳びえて居る……。

間もなく南京路には、ひっきり無しに自動車・オートバイ・戦車・馬・人、ドン／＼ドン／＼動き出した。突如、旅団司令部より旅団長閣下を乗せたタクシーが、一散に南京城に向つて走り出す。

此の時誰云ふとなく、『南京の敵は我が軍の猛攻撃に耐え兼ね、昨夜、あの堅固な、難攻不落を誇る城壁の陣地を捨て、何れにか退却、我歩三六は午前五時堂々城内に入城を開始せし』と。

かゝる中に夜は全く明け離れる。見よ、我等待望の城門には、高く／＼日の丸の御旗が、朝風にへんぼんと翻つて居るではないか。眼鏡を出して見れば、城壁には歓喜に充ちた第一線勇士達が万歳を叫んで居る。実に御苦勞であつた。幾多の戦友を倒され、喜び

を共に出来ざるとは云へ、上海上陸以来、日夜夢にも忘れられなかつた南京城を占領した喜び、嘸かし彼等は泣いて居るであらう。然し、かゝる彼等の勲を眺めるにつけ、自分の事を顧みて実に残念でたまらない。何とか南京攻撃の第一線に参加したく思つて居

乍ら、今一足と云ふ所まで来て旅団の子備隊となり、後方にて敗

残兵位相手の戦闘しか出来なかつたとは、全く情なく思はれて仕様がなない。

八時―九時―十時、砲撃開始の予定の間になつても、敵が逃げたため砲撃も開始されない。相変らず後方よりは、あらゆる部隊がどん／＼前進して行く。何だか我々のみ取り残されたる様にて、口惜しくてたまらない。然し、すぐ入城し得るものと考へ、出發準備を完了して待つて居る。午後一時頃、小林と二人で昨日まで居つた旅団司令部の位置に行き、何か見て来ようと思ふ。もう半町程で司令部と言ふ附近に来た時、何事ぞ、目前に於て大き

な／＼轟き、天地もさけるかと思ふ様な大きな爆弾投下だ。ワットばかり附近に居合せたる大小行李を始め、人馬は皆慌てふためいて逃げ出した。続いて前後左右、一度に十数発の爆弾の破裂する音、此れには全く驚いてしまった。戦車以来の恐しさであつた。

然し、幸ひにも何ら負傷者もなく終つた事は、実によかつた。敵の飛行機は約三台とか。高度は三千米以上もあらう。爆音も、極めてかすかにしか聞き取れない位であつた。敵の爆撃を受けたのは今度が始めてにて、皆々驚くのも又無理ない事である。

(欄外) 「光華門入城」

午後一時半出發命令下り、いよ／＼南京入城となる。午後二時出發、太鼓橋を渡り約半里程前進す。鉄橋上の敵の死骸、道路上の友軍の奮戦の跡、塹壕中に「勇士の戦死の所」と書かれたる墓標等、実に未だ血腥き戦場である。

城門は完全に叩き壊されて居るため、入る事出来ず、傍よりまる

で山に上る様にして這ひ上つて上る。高さ約三十尺、上頂上は巾約十米もあると言ふ。大したものである。城内に入つて見れば、街は案外寂しい田舎であるのに驚く。その筈、此の附近は、言へば郊外地にして、南京の繁華街は西北方である。

午後三時、井出部隊本部前に集合。我国始まつて以来、前千古未曾有の外国の首都に入城するの、歴史的記念すべき此の一大事を敢行するに就ての、種々の注意事項を伝達され、二階建ての、チャンにしては洵に立派過ぎる程の文化住宅に入り、夜の準備をする。

本日の命令により、第一小隊のみ旅団予備隊、第二、第三小隊は大隊復帰となり、原隊に帰る。

午後七時頃、情報によれば、第三軍司令部、約三千の敵敗残兵の襲撃を受ける恐ありとの事にて、第十九は急ぎよ此れが救援に向ふ。旅団副官中川少佐、相変らずの小心から、旅団司令部も未だ危険なりとの言ひ、予備隊全員陣地攻撃、警戒配備に就けとの事にて、夜遅くなつてから作業をなし、第二、第五、第六分隊は塹壕暮し、第三分隊は司令部内の事務室の一隅にて、待期の姿勢にて夜を撤する事となる。

全く予備隊にはあきくす。もう敵兵一名居ると言ふぢや無し、而も後方の旅団司令部に於て予備隊が塹壕暮し、他の部隊は、立派な家の中に蒲団の中に南京の第一夜を明かすとは、考へても腹が立つて仕様がな。

十二月十四日 晴

赤穂の義士討入りせし日、我等又、目差す敵の首府を陥れたる事は実に愉快である。

旅団司令部事ム室の一隅に夜を明かした我々は、昼間は引揚げ居室に於て休む。もうすっかり敵も沈黙し静かである。街路には自動車・トラック旺に通ひ、平和の気分溢れて居る。今日は大根おろし、大根のお煮や等珍しい御馳走を食べる。夜は昨夜とは異ひ、歩哨のみにて警戒せり。

斎藤秀雄、俺の分隊へ来る。

十二月十五日 晴

懐しい故郷離れてより丸三ヶ月、自己の無事息才なる事を喜び、故郷の空を拝す。

昨日日附の新聞号外を見る。内地は大した騒ぎらし。提灯行列、旗行列、祝賀会、戦勝祝ひ等々、新聞は大した祝ひ方である。脇坂部隊の一番乗りも書いてある。又、北支北京に於ては、中華民國臨時政府なる、所謂満州国の第二の国が生れた事が書かれてあり、益と正月と一しよに來たやうな楽しさである。然し、近衛首相も、真の持久戦は此れからだと言つて居られる。まだく戦争は続くものと覚悟せねばならないけれど、戦争は確に一段落着いた事は事実らしい。

久しぶりに見る新聞にて、思ひ出であつた。

本日の報

十八日入城式挙行

の予定

十九日慰靈祭挙行

第九師団は近く某方面に移動するらしい。

十二月十六日

本日、一等兵にして上等兵進級者の上申をなせり。我分隊より、土本・小林を特に申告す。

我々の進級は何時の事やら、一寸馬鹿らしい気がする。然し、命あつただけでも喜ぶべきである。

第九師団は、上海へ帰る、否、蘇州警備だ、否、常州だ、金壇だと、いろいろの噂あり、何処か判明せず。何れにしても、何処かで警備に就く事には間異ひないらしい。

大平学

太田棋

三分隊へ来た。

十二月十七日 晴

本日、南京城入場式<sup>マツ</sup>挙行サル。天気晴朗気持ヨシ。

朝早くヨリ、我軍ノ飛行機飛ビ交ヒ、正ニ歴史的記念日ニフサハシイ。我等ハ残念乍ラ旅団予備隊タル為メ参加出来ス。

聯隊ハ、午前十時旅団司令部前ノ広場ニ整列、軍旗ヲ迎へ、異郷ノ空高く、ラツパノ音モ勇マシク市中ヲ行進、場内飛行場附近<sup>ウツ</sup>に到リ入場式ヲ行フ。午後二時半頃帰ル。

湯谷上ト兵病院ヨリ帰ル。第二分隊へ入ル。

十二月十八日 初雪

本日、上海方面軍ノ大慰霊祭挙行セラル。

例ニヨリ我小隊ハ参加セス。松井最高指揮官、朝香軍司令官ノ宮殿下モオ出ナサル。城内飛行場ニテ執行セラル。

今晚ハ、小林君等ノ働キニヨリ、約八寸位ノ魚ヲ捕へ来リ御馳走ス。久シブリノ魚テアツタ。

本日ノ命令ニヨリ、明十九日午前十時、十九Rノ一ヶ小隊ト旅団予備隊ヲ交替ト定ル。

十二月十九日 晴

午前六時起床。朝食ヲ済マセ、分隊ノ色々ノ物品ヲ中隊ノ位置マデ運ブ。十時ニナルモ十九R来ラス。十一時二稍<sup>ツマ</sup>ク来ル。

交替シ、十二時頃、中隊宿舎ノ第三階ノ一番悪イ場所へ入ル。今マデヨリ余程居心持悪シ。

午後二時半ヨリ、南京市内見学ニ行ク。市政府ハ見タルモ、南京政府ハ見ス仕舞。

大シタ見ルヘキ所モ無シ。午後五時帰り寝ル。

十二月二十日 晴

三階ノ屋根裏ニテ、テンプラを作ったり、明笛を吹き鳴らしたりして一日を送る。別に変つた事も無し。

河端の兄さん来られて、みかんの缶詰を貰つて食べる。我聯隊は今度、南翔・嘉定・劉河方面の警備と定る。

廿四日出発との報も聞く。

大した事無けれ共、戦争よりは良しと思ふ。

サイダー・ようかん・たばこ・キャラメル等食す。

十二月二十一日

本日、朝香宮軍司令官殿下には光華門に成らせられ、我Rの激戦の跡を偲ばせ給ふ。我々は、午前十一時整列にて、此れが御警衛

に行く。

光華門に至れば、実に激戦なりしが偲ばれる。南無妙法蓮華經の忠魂も建てられて、一入涙をもよほさしむ。

防空学校に到れば、故陸軍歩兵伍長川田小石之墓と書いたる棒柱あり。川田もとうく戦死せしか、可愛さうな事だ。

午後五時帰る。

十二月二十二日

朝七時起床、点呼、我分隊は早々に飯を済ます。午前八時小隊全員体操、俺が号令をかける。毎日此れが朝の行事である。

相変らずてんぶらの御馳走だ。おいしい。大根・ねぎ・牛缶・豆等、なんでもてんぶらだ。帰ったら家の者に振ふまつてやらうと思ふ。

テニスを少々やって見たり、走って見たり、足ならし、腹へらかしの運動をする。

小隊長と永い話して見たりす。

十二月二十三日 少雨

どんより曇って居た空は遂に雨となる。皆んなは明日の行軍を目ざして、自転車・人力車いろく集めて居る。俺は相変らずにて何処へも行かず、少隊長殿の下にて色々話して暮す。

晩までに分隊全員出発準備を完了し、最後の南京の一夜を休む。

十二月二十四日 少雨 寒風有

午前五時起床、六時半整理、思ひ出の体操場へ。

七時半出発にて南京を去り、長の旅路に出づ。雨はしよば降り行

軍には悪し。午前八時過ぎ南京城門を出づ。午後四時過ぎ土橋鎮湯水鎮を過ぎ去り、約一里前進、行程約七里、一寒村に宿營す。途中、中山陵・軍官学校・教導学校・砲兵学校等有。

又附近の家々は、全部焼き尽くされ悲惨を極む。

十二月二十五日 晴

午前八時、道路上に集合し行軍を始む。句容を過ぎ、午後三時頃宿舎に入る。相当道路より離れ居る処にて最も悪し。

十二月二十六日

朝、人力車のみ先行。相変らず重い背ノを負ひ行軍を続ぐ。白頭鎮も過ぎ去り、午後二時半頃一部落に入る。聞けば、人力車・米袋共盗まれたとの事也。

大平は洵に気俣、駄目な男也。丹陽まで約三里と聞く。

十二月二十七日 晴

午前八時集合にて丹陽に向ふ。午前十一時丹陽に到着。一時間以上休み、昼食を喫し、滞在地に向ふ。線路上を行進し、約一里にて宿營地に到着す。

相変らずの焼跡にて困る。第一小隊のみ別に宿る。聯隊本部の歩哨を立てる。

大平豚を持ち来る。北山重次郎病院より帰る。

十二月二十八日 少雪

今日は滞在日也。朝長く寝て居る。二分隊のお湯に入り、後は明笛を鳴らし、太鼓を打ち、大いに騒いで暮す。

雨降り出し、後には雪となる。北山・大平・平井達カブをやり、

約五時間も続ける。

夜も歩哨を立てる。

三島伍長・東作菜、汽車にて設営として先行。

十二月二十九日 曇

昨夜来の雪は約二寸積る。午前七時二十分整列にて、八時より鐵路伝ひに、常州に向ふ。大平達は舟にて行く。雪道にて極めて道悪し。約五里前進して一小町に泊る。

午後七時頃、便衣隊員らしい者一名連れ来り、土本等と共に惨殺す。大根のお菜おいしかった。

十二月三十日 晴

朝八時より出発、道路上よりクリーク伝ひに常州に向ふ。午後二時頃常州に到着。移動酒保有り、キャラメル・カステラ等食す。

常州の一隅に一宿す。

十二月三十一日

午前八時より無錫に向って行軍。約三里前進致し、それより鐵路伝ひに前進す。仲々強行軍にて疲労す。今日の行程約七里、横林等も通過し、無錫の手前約二里の処に宿営す。

思へば今日は大晦日なり。昭和十二年度の終りの日である。

十二年は色々の思ひ出の年であつた。然し、今年一年を命永らへ、無事過した事に、先づ第一に感謝すべし。

(欄外)「昭和十三年元旦」

一月一日

元日朝八時より行軍。午前十一時過ぎ無錫に到着す。二時宿舍に

入る。無錫は自治委員会設立され、仲々統制有り。

支那人の友達出来る。仲々のインテリにして可愛し。名は欽忠と言ふ。二人兄弟にして一九才と一七才、面白し。

夜は下賜品多数有り、面白く歌ひ、飲み、久しぶりに大いに騒ぐ。陣中のお正月楽しかった。

一月二日

午前八時半まで朝寝坊致し、それより朝食を食べる。早速欽君等と遊ぶ。豆腐・魚を買ひ、おいしい昼食、酒も昨日の残りあり。今日は欽君に、大いに我国の大方針を筆にて話してやる。彼も同感なり。支那バイオリンを奏し、君が代を唄ふ。大いに意を強うせり。

夜、彼のサインを求め、おみやげを貰って帰り、九時寝に就く。

一月三日

午前七時半整列にて、欽君等の名残惜しき見送りを受け、先づ望亭に向って出発す。行程約六里也。無錫の宿舍は追撃の折泊った附近、梅園行きのあの苦勞を思ひ出す。望亭は雨の日泊った処、皆焼け、荒れ果て、見る陰もなし。

菜も無く、淋しい夕食であつた。

一月四日

望亭出発、鐵路ならば僅か五、六里なるに、道路行軍の爲め、約六里前進して一小町に泊営す。明日は蘇州也。

途中命令下り、俺は歩兵伍長に任せらる。遅いけれど喜ぶべし。

一月五日 晴

午前八時出発。間もなく蘇州見え始め、正午前蘇州に到着、宿舎に入る。途中酒保にて、酒・ようかん・するめ・缶詰等多数、約八円買ひ来り、任官祝ひに皆で飲む。

今日、長谷川伍長以下十一名帰りに来る。鳥教一等もあり。宮脇君も原隊復帰し来り、大いに話す。若林与二郎の話、最も可愛さう也。矢野の不人情は、実に言語道断と言ふべし。

一月六日 曇 寒し

午前七時二十分整列にて出発。道路を歩む事約六里半、唯亭鎮に泊営す。此処も一度泊った処なり。二階に寝た所、とても暖かですよかった。然し、けむいには困った。

北山重次郎相変らずの怠け者、実に困ってしまふ。せめてもう少し働けばよいのに。

一月七日

正儀鎮ヲ出発、崑山に向ふ。午前十時頃、懐しの崑山に到着、糧秣を受領し、再び行軍。寒い事、寒い事、手も耳もちぎれる様だ。午後四時頃、太倉城外に着き、最後の支那家屋の舎営をなす。明日はいよいよ、劉河鎮に到着である。

夜通し強い寒い風あり。

一月八日

午前八時半出発、最後の行軍なり。途中昼食を執り、約三十分行軍にて劉河鎮に着く。

遠方より見れば中々立派な町であったが、来て見れば物凄く荒れ果てたる街である。然し、支那人皆々良い着物を着て、万才を叫

んで出迎へてくれる。宿舎に入る。三島・東等先発者、皆々迎へてくれる。相当良い家なるも狭くて困る。

一月九日

劉河鎮第一日の夜を明かした我々は、不備な舎内を改造する。手紙を書くなどして一日暮し。

一月十日

(マ)

(コノ後一〇頁分ノ空白アリ)

### 三 覚書

\*一分隊 酒保 川口 石田 西村 古川

二分隊 田中 馳川 吉川

三分 (マ)

(以上鉛筆)

「今天此処泊宿

逃亡殺

你責任 他者言

飯後寝

(以上万年筆)

(コノ四行ハ武ノ手デハナイ)

\* (写真5)

\* 懐亡児涛涛

浪淘沙

涛児以民国廿六年禹曆五月廿五日晚十時半天殤、伊生於廿二年禹曆十二月廿四日巳時計生四十三月又一日迄、今埋骨

(以上ノ漢詩ハ武ノ手デハナイ)

黄土又是二月母親及蕙時致想懷熱淚滾然、因賦此紀実時廿  
六年初秋禹曆七月廿二日也、

白髮对青緑〇一樣淒迷〇暮然青塚撩人思〇又是秋風時候也〇  
秋艸離離〇寒淚湿山衣〇雲压烟低〇朦朧斜月映簾帷〇断続鳴  
蟲携手処〇記否年時〇 (以上万年筆)

\* 禹曆廿六年七月叔真妹婦自奉賢、言及涛児死状相與愀然、  
吟詩四絶即以詩慨

□□尊酒感生乎〇十載□難最次行〇我是亦夜台□旦暮〇離魂  
好自作秋声〇□塵絮絮憶從前〇爾已無憂私欲顛〇握手語來便  
尽語〇莫教欲語已長眠〇

断続秋蟲帶淚聽〇神衰心死一燈青〇長河但願尽為酒〇沈醉西  
風永不醒〇

棠棣花開共四枝〇可憐寒暖不同時〇秋江落木爾爾裏〇蕊葉飄  
零幾個知〇 (以上赤万年筆、水デ消エタ部分アリ)

\* 秋來肅瑟必異常以久、不飲酒更難遣解、昨友邀小酌竟一飲  
而醉、步出北郊涛児藁葬処也、撫今追昔創痛欲絶感心而作  
此淚墨潜然、

容易愁來去却難〇初秋涼露送微寒〇如何一樣燈前酒〇少個人  
児不覺歛〇

西風落葉又紛々〇階砌鳴蟲断続聞〇攬衣哭上北郊路〇低徊荒  
塚对斜聽〇

看人児女各成行〇俯首玄然亦自傷〇イイ帰來旧室裏〇篋中猶  
有児衣装〇

\* 步三六補

お守様 一五四四

認識表 印鑑

金五十一円十三銭

戦死 砂原善作

十二月十日午後五時十五分

\* 八 東

九 土本

十 小林

十一 上木

十二 山口

一 藤田

二 野本

三 大滝

四 松田

五 桜井

六 坂井

\* コ上 村北留吉

上 長谷川海陸

二 前川利見

\* 功績覚書

一、相家橋

十月十日ヨリ  
十月十八日マデ

分隊長松田伍長 十月十二日

中隊長殿死骸<sup>(搜)</sup>サウ索ノ為メ、決死隊長トナリ、孟家宅陣地

ニ赴ク。

兵ノ序列

上野孝三 角平 明 名葉善一

松永 馨 青山 緑 石本孝二

河野修一 牧野昌直

上野・角平最モヨク働ケリ。

青山・河野・牧野腹痛ニテ入院。

\* 陸家橋ヨリ走馬頭<sup>(塘)</sup>クリーク<sup>(船)</sup>仙子ヘウ

分隊長松田伍長

敵弾下ニテクリーク<sup>(マ)</sup>に架橋ヲナス。腰マデ浸リ乍ラ水中ニテ

橋ヲ架ケ、中隊長以下第三小隊、MG隊ノ一部ヲ渡河セシム。

材料運搬 松田・山本・村瀬

架橋 松田・山本

二軒家附近ノ戦斗

午前六時斥候 村瀬・上野

午前九時斥候 走馬頭附近、地形・敵情サウ索。

長 山本上下兵 兵 村瀬・角平

午後

\* 走馬頭クリークノ戦斗

第一回 斥候 長 篠崎上下兵 兵 村瀬・石本

第二回 長 山本上下兵 兵 村瀬

第三分隊ハ第一分隊ト協力シ、クリークニ通スル交通壕ヲ作ル。

○クリーク渡河後ノ戦闘中、石本孝二ハ分隊ヨリ離レ、我々ト

行動ヲ共ニセス。援隊第四分隊中ニ在リ。

○上野孝三八敵<sup>(マ)</sup>の掩蓋ヨリノ出口附近ニ位置シ、多数ノ手榴彈

ヲ浴ヒ乍ラ、勇敢ニ敵ノ出テ逃ケントスル者ヲ鑑視、三名ヲ

射殺ス。

後、山本ト村瀬ト二人ニテ、ソノ掩蓋中ヲ掃蕩シ、敵三名ヲ

倒ス。

\* 序列

上野孝三

村瀬

大滝

篠崎

角平

名葉

石本

仙家橋攻撃

\* 第一小隊第編成表

第一 コ上、 平井光房 舟

設 コ一、 芳井孝三

守 コ一、 石内虎雄 舟

川口拉雄 7

島

コ一、 山本喜八郎

三

コ一、 古川卯二三

コ一、 亘守一

第二

コテ上、 田中金一

コ一、 立見鶴吉 南

コ一、 小川久次郎

コ一、 吉川小助 舟

コ一、 馳川一次 7

コ一、 飯田四郎

コ一、 畝田外吉 南

コ上、 湯谷與次郎

駒田

\* 第三分隊

コテ上、 山本 武

ヨ上、 太田 棋

コ一、 土本 部 指

コ一、 小林末男 7

コ一、 東 作栄 設営

ヨ一、 斎藤秀雄

コ一、 舟 大平 学

ヨ一、 北山重次郎

第五分隊

コ上、 黒川清則

コ一、 藤田日出雄

ヨ一、 山口治三郎

コ一、 野本十太

現一、 上木一雄

一、 大平虎雄

\* 第六分隊 ヨテ上、 高間友次

ヨ現一、 大滝英雄

コ一、 桜井明松

コ一、 酒井与一

ヨ一、 松田隆雄

コ一、 前田梅吉

一、 斎藤隆男

長以下三十三名

十二月十七日現在

\* 坊や泣かずにねんねしな

父さん強い兵隊さん

その子が何て泣きませう

泣きはしませぬ

遠い満州のお月さま

ねんねおしくねんねすりゃ

父さん匪賊退治して

凱旋なさるおみやげは

きつと坊やの

可愛い坊やの鉄かぶと

6

5

(以上万年筆)

坊も大きくなつたらば  
兵隊さんで出征して

母さん送りに行つたなら

汽車の窓から

笑つて失敬するでせうね

(以上鉛筆)

\* 万年筆 手帳

(写真6)

\* 上司注意事項

十二月廿三日

一、戦斗ハ終リニ非ス。戦争ハ此レカラ也トノ心得ヲ持ツコト。

二、<sup>(起)</sup> 參謀長注意事項

一、軍規・風規ノ振作。特ニ敬礼ノ嚴格ニ注意スヘシ。

二、命令趣旨ノ<sup>(徹)</sup>徹底。

三、士氣ノ振作。

四、士氣指揮統御ノ嚴正。

五、教育訓練。

1. 先ツ兵ハ、狙撃・突撃ノ演練。

六、戦力・資財ノ整備、兵器・被服ノ手入・愛護。

七、警戒心ノ旺盛。

歩哨ニ於テ而リ。

\* 支那人ヲ使用シテモ、特ニ心ヲ緩メサル様ニ注意スヘシ。

支那人ニ日本語ヲ教ヘテ使用スヘキコト。

八、軍機ノ保護及防諜ニ就テ。

聯隊長注意事項

一、軍規・風規ノ振作。

二、長途ノ行軍ニ於テ落伍者ヲ出ササルコト。

三、支那人・人力車・自転車ノ使用ヲ禁スル。

四、兵教育ニ於テ刺突・突撃ヲ演練。

五、兵器ノ手入・保存。

○内務ノ緊縮。

\* 六、警戒心ノ旺盛。

緊張味ヲ欠ク。

滞陣間犯罪者ヲ出ササル様留意スヘキコト。

滞陣間ノ仕事。

一、戦力ノ回復。

二、治安工作ヲ行フ。

三、教育訓練。

廿四湯水鎮 廿五句容

廿六丹陽

廿八白頭鎮

廿九日九里峰 卅日常州

一日黃隣林鎮 三日無錫

望亭

蘇州

唯亭鎮

崑山

劉花鎮

○外套無キ者ハ毛布。

○営外者ノ食器持参ノコト。

○人力車ノ使用ハ中隊テ四台トス。

○一日行程ハ約六里。

分隊員ノ人員、兵器種別・員数等、毎日調査シ詳細ナラシムルコト。

滞在日ノ朝、兵ノ成績ヲ出スコト。

宿营地到着直後、異常ノ有無ヲ報告スヘキコト。

\*中国新政府樹立

(写真7)

\*你名前 「欽忠」

(写真8)

\*山本 化工 八〇三二三

斎藤 藤倉 八八七七〇 九九

小林 々々 六八一八 々々

大平 々々 六八〇五 々々

土本 々々 六八一六 々々

東 化工 口五二五 二 々々

北山 ナシ

太田 ヨロシク頼ム

一、十三日前九時身体検査。

二、十四日後一・〇〇衛生講話□中。

三、

\* 聯隊長殿作詩

力攻占拋光華門 南京城壘為之陷

曉雲勿散繚旭旗 感激皇恩拜東天

(以上鉛筆)

(以上万年筆)

十二月十二日南京陥落の日

於南京城内

一、五、四、二、防雨 七

襦袢 四 袴下 三

失 二、二、ゴム 二

「蔣介石 国民政府

打倒了

中国新政府樹立

首府北京

(右ノ「」内ハ武ノ手デハナイ。或ハ欽忠カ。)

\*一、上海附近の戦斗より、南京攻略までの重要戦斗を織込ムコト。

二、第九師団たるの特徴を表現する事。

三、字句ハ平易にして一般に理解し易き事。

四、歌詞ハ六句六節以内タルコト。

(以上鉛筆)

\* 1. 上 田中金市

一 土本 薺

2. 東 薫

伊藤伊三二

黒木 正

3. 鍛冶利一

田辺 実

田中 □

\* 日本是黄種  
中国是黄種

共存共栄

倒打共產俄国

日 戦争是黄種不幸

新国家将来発展

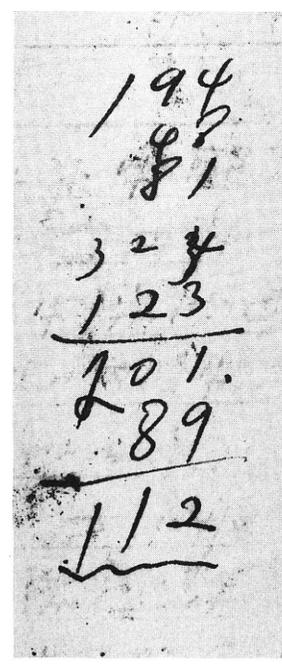
中国人幸福

是中国青壯年責任

(最後ノ\*以下モ武ノ手デハナイ。或ハ欽忠カ。)

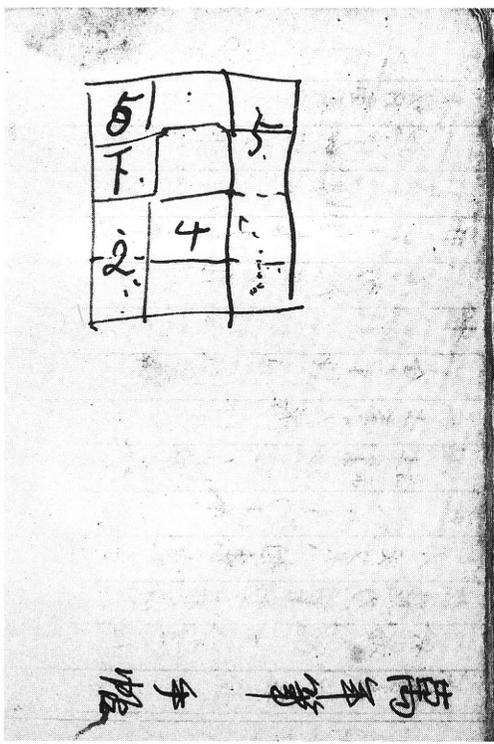
(以上万年筆)

(写真5)



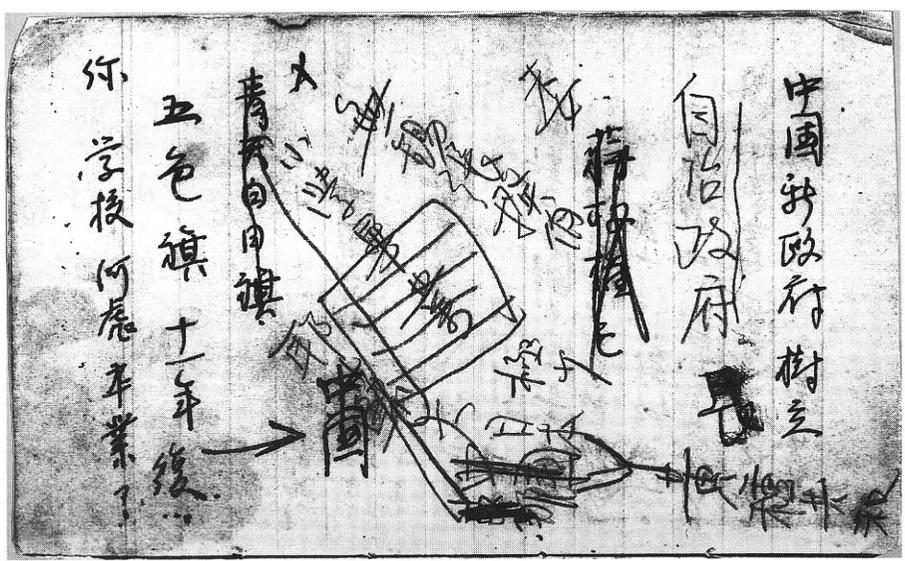
(万年筆)

(写真6)



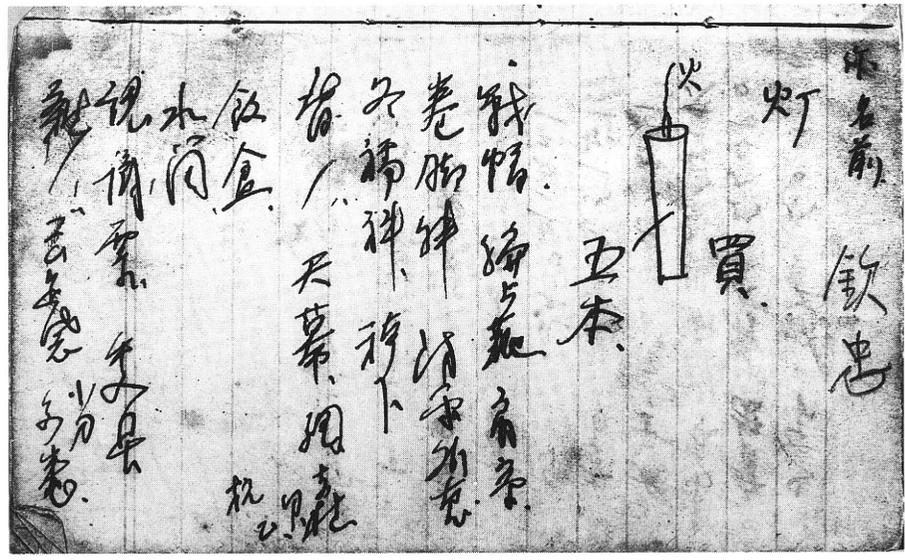
(万年筆)

(写真7)



(筆談ノ部分、薄ク見エルノガ鉛筆、他八万年筆)

(写真8)



(「欽忠」ガ鉛筆、他八万年筆)